

2022年1月5日

みずほディーラーズアイ (2022年1月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 113.50 ~ 117.00

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰成

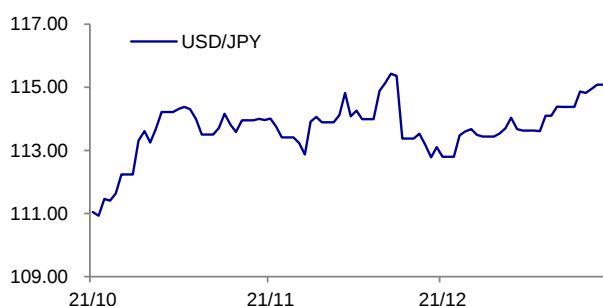
■ 先月の為替相場

先月のドル円は、12月のFOMCでテーバリングの加速が決定された他、利上げ時期の前倒しが示されたことで115円台までドル高進行。

月初は、前日のパウエルFRB議長のテーバリング加速についての発言を受けドル買い。113円台半ばを堅調に推移も、オミクロン株への警戒感から112円台後半まで値を下げた。2日には米長期金利の上昇を受け、113円台半ばまで上昇。3日は米11月雇用統計にて非農業部門雇用者数が前月比21.0万人増と予想の55.0万人増を下回り、かつ、平均時給も前月比0.3%上昇と予想の0.4%上昇を下回ると下落。112.56円まで値を下げた。6日は、オミクロン株を巡る懸念が後退すると113円台半ばまで回復。7日は前日のリスク選好地合いが継続し、113円台後半まで上昇。8日、海外時間に米製薬会社がワクチンを3回接種すればオミクロン株を抑制可能という試験結果を公表すると、113.95円まで急伸。9日、株式市場の軟調推移と米長期金利の低下を受け113円台前半まで下落。その後、米新規失業保険申請件数の結果が市場予想を下回ったことで、113円台半ばまで値を戻した。10日、米11月CPIの結果が約40年ぶりの高水準となったものの、予想を上回るものでなかったため、113円台前半まで押し戻されてクローズ。13日の週は後半にFOMCなど各国の中銀イベントを控えての様子見の展開。113円台半ばを中心に狭いレンジ推移となった。15日はFOMCではテーバリングの加速が決定された他、利上げ時期の前倒しが示されたことで、114.28円まで急伸。16日は英中銀の利上げによる対ボンドでのドル売りがドル円にも波及し、米金利低下も相まって113円台半ばまで急落。17日、ウォラーFRB理事の早期利上げを支持する発言でドルが買い戻され、113.71円で越週。20日、新規材料難の中、113円台半ばで揉み合い推移。21、22日は株式市場の堅調推移を受けて113円台後半で底堅く推移した後、海外時間に入り米長期金利上昇に伴うドル買いから114円台前半まで急伸。23日、クリスマス休暇を目前に控え小商いの中、株式市場や米長期金利の堅調推移を受けじり高の展開。24日は前日の流れを引き継ぎ底堅い動きの中、114.30円で越週した。27日は海外祝日で市場参加者が少ない中、節目の115円手前で米長期金利の低下がドルの重しとなった。28日も115円の上値が意識され、114.80円を挟んだ揉み合い推移。29日、クリスマス休暇明けで市場参加者が戻ってきた中、円売り優勢の展開となり、11月26日以来の115円台回復。年末にかけて米経済指標が予想以上の結果となるも、115.10円付近を揉み合い推移し、年越え。3日も底堅い推移で115.30円付近まで上昇して同水準を推移している。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

今月のドル円は底堅い推移を予想する。

2022年、世界の中銀は金融政策の正常化が大きなテーマとなろう。21年終盤に入りFRBは11月に資産購入の減額を月150億ドルと決定した後、12月には300億ドルへと倍増。直近の政策決定会合を次いで修正するのは、過去の例からすると異例であった。強いインフレが止まらず、パウエル議長の記者会見でも声明文でも、「一時的」としていた認識・表現を訂正した。今は賃金の上昇も加速しているため、実経済には大きなダメージはないが需給両面で物価上昇圧力が収まらない懸念が根強い。

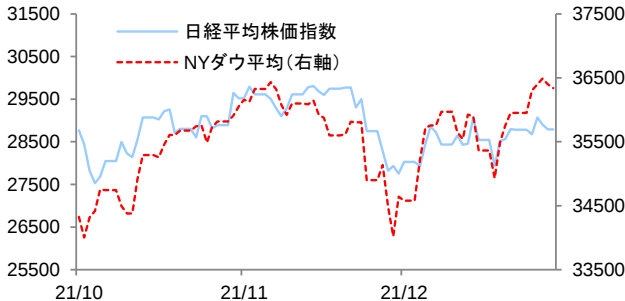
テーバリングを22年3月頃に完了予定に前倒したのも、利上げのカードを速やかに切れるようにしておきたいFRBの焦りからであろう。市場では早ければ22年前半にも利上げが始まり、3～4回の利上げが予想されている。ただ、短期金利の利上げを進めると、長短金利差縮小が進み、金融機関の収益を圧迫する等、次の金融危機に繋がる恐れがある。テーバリングを完了させた後、利上げの回数に注目が集まっているが、同時に短期金利の利上げだけでなく、長期国債の保有削減を通じて、長期金利に上昇圧力をかけることも今年のFRBの議論のテーマとなると思われる。

一方で国内に目を向けると日銀が金融引き締めに動く気配は見られない。115円台を再び維持して年を越えており、一部では「悪い円安」と言った言葉も聞こえ始め、日本経済にとってプラスではなくなってきたドル高円安に待ったをかけたい当局の思惑もあろう。120円台が見えてくると当局者から円安を止めるような発言があるかもしれない。今月ではないと考えているが、時間の問題であろう。

足元、テクニカル指標を見ても、日足の一目均衡表の雲の上限は昨年末切り上げており、ドル円の上昇をサポートする形となっており、新年の1月も114円に雲の上限が構えている。月末にかけて雲が薄く、また捻じれも見られるため警戒はしておきたいが、雲の上限は113円台後半を維持しており、新型コロナの急感染などの相場急変時に下に抜けなければ、底堅い推移をすと考えている。一方で、昨年クリスマス付近からボリンジャーバンド(2σ)の上のバンドに触れていることには気掛かりであり、相場の一服は月中に見られると想定している。しかし、実需勢はこれまでドル売りよりドル買いのタイミングを逃してきた割合が多いと想定され、113円台後半では買い支えられると予想する。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	ISM製造業景況指数	11月	61.2	61.1	60.8
12/3	非農業部門雇用者数変化	11月	550k	210k	546k
12/3	失業率	11月	4.5%	4.2%	4.6%
12/4	ISM非製造業景況指数	11月	65	69.1	66.7
12/10	CPI(前月比)	11月	0.7%	0.8%	0.9%
12/11	ミシガン大学消費者マインド	12月	68.0	70.4	67.4
12/15	NY連銀製造業景況指数	12月	25.0	31.9	30.9
12/15	小売売上高	12月	0.8%	0.3%	1.8%
12/16	FOMC		-	-	-

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	20名	117.00 ～ 113.90	ベア	1名	116.00 ～ 112.50	※ レンジは中心値	
田中	ブル	118.00 ～ 114.00	オミクロン株感染拡大も重症化率が低い影響は限定的と織り込み済み。一方で供給面の制約によりインフレ懸念が強まることが見込まれFED早期および複数利上げ観測にドル円は堅調地合いを予想。				
矢野	ブル	117.50 ～ 114.50	米国では①「22年3回の利上げ」、②「堅調なファンダメンタルズ」、③「供給制約緩和に伴うインフレ懸念の後退」が見通される中、確りの展開を予想。オミクロン株感染拡大はリスク要因だがあくまで一過性としている。				
筒井	ブル	116.00 ～ 113.50	米利上げ及びQT開始時期が、為替市場の注目。但し1月は、経済指標に一喜一憂となるも決定打なく、ややブル目のレンジ推移を想定。キーは米国債5年金利水準。為替水準との相関性が高くなっている。				
加藤	ベア	116.00 ～ 112.50	相対的な金融政策の格差によって円安圧力が継続することは自明であるものの、実質実効レートの黒田シーリングの際と同レベルの円安であり、7月の選挙も視野に入ってくるとなれば当局から何らかの牽制はあり得る。				
伊藤	ブル	116.50 ～ 113.00	インフレ対応が最重要課題となった今、米金融政策の舵取りに注目が集まる。利上げは既に織り込まれているものの、タカFEDの動きにドルは底堅い動きとなると予想する。米長期金利の上昇に伴えばドル円は高値を何う展開に。				
山岸	ブル	117.00 ～ 114.50	ドル円は高値もみ合いを予想。米FRBの金融政策正常化で基調としてドルが買われやすい。一方、金利先物ではすでに来年3回の米利上げを織り込んでおり、バランスシート縮小(QT)など、新たな材料が出るまで、上値も限定的か。				
牛島	ブル	117.00 ～ 114.00	早ければ3月の利上げが期待される中、日米金融政策の違いからドル円は底堅い展開を予想。新年からリスクアセットが買い戻される展開が続けば、クロス円上昇もドル円をサポートしそう。				
尾身	ブル	117.00 ～ 113.00	FRBの年内利上げ開始を見込んでドル買い相場は継続していると考えている。このため、株式市場の調整は懸念材料。高値更新の可能性も否めないが、高値からの反落も想定しておきたい。				
上野	ブル	118.00 ～ 114.00	金融政策における米国のステージは変わりつつある。そして、リスク要因であるオミクロン株の相場感応度は低下している印象。基本的にはブル目線であるが、21/11の高値(115.52)を明確に上抜け出来るかが分水嶺に。				
山口	ブル	117.00 ～ 113.50	日米金融政策の方向性の違いからドルの底堅さは継続する。市場ではインフレ高進への警戒から、米国が今年3月の利上げ開始の可能性も浮上しており、経済指標の発表を受け期待感が高まるとドル円は昨年の高値更新する展開となる。				
甲斐	ブル	116.00 ～ 114.00	オミクロン株による感染拡大は継続するものの、重症化リスクが限定的となる中、緩やかなリスクオン相場が継続すると予想。22年中の利上げ時期前倒しなどが意識される中で、円安が進行すると思われる。				
小野崎	ブル	117.00 ～ 113.50	二択であれば円安。日米金融政策の違いに昨年高値は抜けていく展開か。ただし、「利上げ＝円安」を想定するには相応に織り込んでいるのも事実。上値も限られる展開か。				
玉井	ブル	117.00 ～ 113.50	米早期利上げを背景にドル高継続を予想。12月のFOMCはタカ派な内容となったもののその後米金利はさほど上昇していなかった。ただ米金利の出遅れ感があり、是正されるとともにドル高になると考える。				
原田	ブル	117.00 ～ 113.50	オミクロン株の感染拡大が懸念され、各国で対策が急がれる中、米国の年末ホリデーシーズンの動きを見るに経済活動は回復基調。米インフレ率も上昇する中、円が売られる流れは継続しそうだ。				
大庭	ブル	117.00 ～ 113.50	テーパリングを22年3月頃に完了させ、早ければ22年前半にも利上げが始まり、年3回程度の利上げが予想されている中、日銀との金融政策の乖離から日米金利差拡大を背景にドル高継続か。120円台が見えてくると円安牽制発言に注意。				
上遠野	ブル	116.00 ～ 112.50	12月FOMCは市場期待を裏切ることなくバランスの取れた内容という印象で、ドル買い加速材料とはならずサポート継続。オミクロン株やウクライナ問題への警戒感も後退し相対的な円売りも強まる中、ドル円は上値試す展開を想定。				
小林	ブル	118.00 ～ 114.00	FRBによる早期利上げ観測により、米債利回りがより一段と上昇すればドル円も円安トレンドが強まるか。コロナ感染状況等のリスクオフの要素を警戒しつつも、株価や米債利回りの堅調な値動きにドル買いトレンドを予想。				
逸見	ブル	117.00 ～ 113.80	日本の経済回復期待が盛り上がりにくい状況下、円安地合いを想定。また、米の早期利上げが視野に入中、日米の金融政策差が意識され易く、ドル円は底堅い推移を予想。				
大谷	ブル	117.00 ～ 114.00	FRBは12月FOMCでテーパリングペースの加速を決定しており、年前半にも利上げ開始の可能性が燦々している。一方日銀は緩やかな政策を維持しており、日米の金融政策スタンスの差から引き続きドル円は底堅い推移を予想。				
鈴木	ブル	117.00 ～ 114.00	株式市場の堅調推移等を背景としたクロス円売りのサポートもあり、底堅い値動きが継続。FRBでもタカ派寄りの内容が目立ってきており、早期利上げ期待が高まっている内はドル買い地合いが続き、上値を試す展開か。				
大熊	ブル	117.00 ～ 114.00	早期利上げ期待を背景に米金利は上昇、米株も最高値を更新し続ける等、米経済の盤石さが伺える。日銀がECBよりも金融正常化から遠い位置にいることを鑑みると円買いの理由が見当たらず、ドル/円は底堅く推移すると思われる。				

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1000 ~ 1.1500
EUR/JPY 128.00 ~ 132.00

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

■ 先月の為替相場

先月のユーロドルは1.13付近でもみ合う展開。月初、1.1330付近でオープン。新規材料に欠ける中、1.13台前半で動意乏しい展開。2日はFed高官のタカ派発言や欧州圏内におけるオミクロン株感染拡大の懸念からドル買いユーロ売りの展開となり1.12台後半へ沈んだ。3日は米11月雇用統計発表後のドルの荒い値動きを受けユーロ/ドルも乱高下したが、米金利下落によるドル売りに押され1.13台を回復。6日、オミクロン株の症状が軽症に留まるとの見方や、中国が事前予想通り預金準備率を引き下げたこともあり、過度なリスクオフの動きが後退。ドル買い地合いの展開となると、ユーロドルは1.12台半ばまで下落。7日には短期的なストップを巻き込み1.1228付近まで下落した。8日は、米製薬会社がワクチン3回接種がオミクロン株に有効との見解を示したことでリスクオン。リスクオフのドル買いの巻き戻しからドル売り優勢となると、ユーロドルは1.13台半ばまで反発。9日、米経済指標が良好な結果となり、ユーロドルは再び1.13を割り込む展開。10日、米11月CPIの結果を受け米金利が下落すると1.13台を回復したが、週明け13日には1.12台半ばまでじりじりと下落。14日は「ECBの23年と24年のインフレ目標が2%を下回ると予測される」とのヘッドラインが伝わるも、トレンドを形成するほどの材料とはならず。15日にFOMCでタカ派的な内容が示されると月安値1.1221まで下落。結果が事前予想の範囲内であったことへの安心感からか1.12台後半まで値を戻した。16日はBOEの利上げを受け、ボンドに連れ高となる形で1.13台半ばまで上昇。ECBでもPEPPの22年3月末での終了が発表され、一時月高値となる1.1360まで上値を伸ばした。しかしその後のラガルドECB総裁のハト派的な発言により1.13台前半まで押し戻された。17日はFRB理事から22年3月の利上げ可能性について言及されるとドル買いが強まり、1.12台半ばまで下落。20日から21日にかけては、特段材料ない中、ポジション調整や米金利の動きを横目に1.1280付近でもみ合う展開。22日、欧州株の堅調推移を受けリスクオン地合いとなると、1.1340付近まで堅調に推移。23日、米長期金利上昇や米経済指標の良好な結果を背景に1.12台後半まで反落する場面も見られたが、クリスマス休暇を控えたポジション調整や株式市場の堅調推移に1.13台を回復。24日は欧米の多くが休場となる中、1.13台前半で方向感に乏しい展開。27日以降、年末年始で市場参加者が限られることや、新規材料もなく、1.13付近でのレンジ推移が継続。

■ 今月の見通し

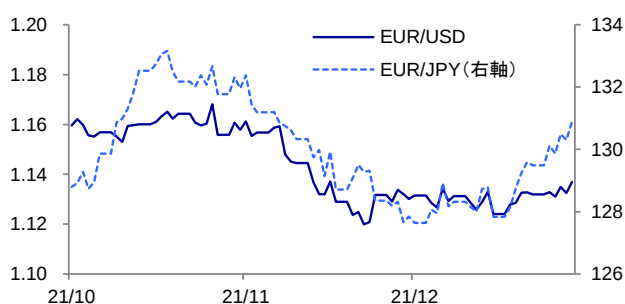
1月のユーロドルは軟調な展開を想定。2021年1月、1.20台前半だったユーロドルは右肩下がりに推移し、11月には1.12台を割り込んだ。約17か月ぶりのユーロ安水準のため達成感もあり、12月にはやや持ち直すも1.130付近で上値の重い展開となった。昨年は対ドルだけでなく、カナダドルやポンドをはじめとするほとんどのG10通貨に対しユーロは下落しており、ユーロ安の年だったと言える。心理的にはユーロ安の継続を想定し難いが、2020年がユーロ高の年だったことや今後の欧米の金融政策差を踏まえれば、今年もユーロは軟調地合いが継続すると考えている。

先月のECBでは事前予想通り、PEPPの3月末終了を決定し、金融正常化に向けて着実に歩を進めた。一方で本枠組みは、必要があればいつでも再稼働が可能とされ、また、激変緩和措置としてAPPによる購入額の引き上げが決定された。利上げ時期はまだ見通せず、オミクロン株の感染拡大が懸念される中で、タカ派シフトは限定的だったという印象。同月に開催されたFOMCでは、テーパリングの早期終了(3月)と金利見通しの引き上げが示されており、早ければ3月利上げも完全否定できないことから、市場では欧米間の金利差拡大が意識されやすく、ユーロドルは上値重い展開か。

オミクロン株の感染については、デルタ株の感染拡大時と比較して重症化リスクや死者数は高くないとの見方から、感染者数が過去最多を更新する地域がある一方で、株式市場をはじめ為替市場も大きな動揺は見られていない。今後、クリスマス、年末年始を経て更なる感染拡大が懸念される中、経済活動優先のスタンスが揺らぐことになれば、欧州圏回避の観点からユーロ売り優勢となる展開に警戒したい。

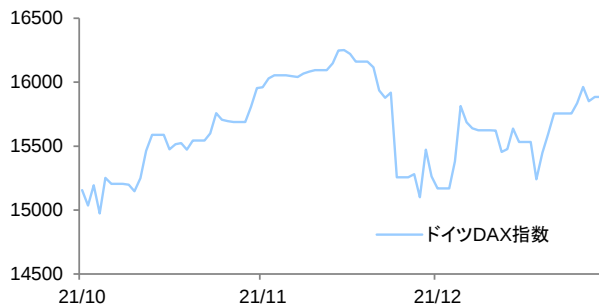
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/6	ドイツ製造業受注(前月比)	10月	-0.3%	-6.9%	1.3%
12/7	ドイツ鉱工業生産(季調済/前月比)	10月	1.0%	2.8%	-1.1%
12/7	ユーロ圏小売売上高(前年比)	3Q	2.2%	2.2%	2.2%
12/7	ドイツZEW景気期待指数	12月	25.4	29.9	31.7
12/16	ユーロ圏マークイット製造業PMI	12月	57.8	58.0	58.4
12/16	ユーロ圏マークイットサービス業PMI	12月	54.3	53.3	55.9
12/17	ユーロ圏CPI(前年比)	11月	4.9%	4.9%	4.9%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	3名	1.1500 ～ 1.1200	ベア	18名	1.1415 ～ 1.1150	※ レンジは中心値				
田中	ブル	1.1450 ～ 1.1200	欧州はオミクロン株感染拡大等で米国対比で不安材料を抱えるが相場への影響は限られよう。またECBもFEDに遅れながらも正常化に向けて追随姿勢を示しており、ユーロドルは決定打に欠く中、需給に支えられレンジ相場継続を予想。							
矢野	ベア	1.1400 ～ 1.1150	コロナ株感染拡大が深刻な中、ECBによるテーパリング、利上げは米国と比してスピード感はない。今月は米国の利上げ期待に対して欧州のそれは想定しにくいことから、対ドルでは上値の重い地合いが継続しよう。							
筒井	ベア	1.1400 ～ 1.1150	2000年以降、米金利利上げと共にユーロは上昇しやす傾向にある。しかし、その利上げはテーパリング終了の3月が最速と想定される中では、金利差によるユーロ売りが進む。							
加藤	ブル	1.1600 ～ 1.1200	ウクライナ問題、および資源国通貨に調整局面を想定すれば、その受け皿としてEURは注目されやすく、元来最大の貿易黒字経済圏であることにも鑑みればEURが調整的に買戻されることを想定したい。							
伊藤	ベア	1.1450 ～ 1.1100	米欧の金融政策のスタンスを鑑みれば、ドル買いが強まりやすい相場に変化なし。サポートされている1.12を明確に割れてくると一段安が見込まれる。							
山岸	ベア	1.1400 ～ 1.1150	欧米の金融政策格差でユーロは上値重い展開か。インフレのピークアウト懸念あり、欧州の物価関連の経済指標に注目したい。12月ECBで量的緩和縮小着手を表明しており、2023年とされる利上げが現実味帯びると底打ち感が出そう。							
牛島	ベア	1.1400 ～ 1.1100	ECBは昨年PEPPの終了を決定し、徐々に金融緩和の出口が見えてきつつあるが、米国が先行している状況下、ユーロは対ドルで上値重く推移しそうだ。未だに新型コロナの再感染拡大に歯止めがかからないこともネガティブ材料。							
尾身	ブル	1.1500 ～ 1.1200	ECBのPEPP終了の決定を受けてユーロ安が一服しそう。APPの段階的減額についても明示しており、ECBの金融政策が引き締め傾向にシフトしたことを受けてユーロ/ドル相場は底打ちするのではないかな。							
上野	ベア	1.1400 ～ 1.1000	金融政策における米国のステージは変わりつつあり、それは欧州との比較でも同様。転換点となるイベントには乏しい認識だが、ドル買いが強まりやすい相場の中でじり安が基本線か。							
山口	ベア	1.1430 ～ 1.1180	新型コロナの感染再拡大を受けた景気回復の鈍化懸念と米欧の金融政策の方向感の違いが重石となり、ユーロは下落継続か。ただし、PEPPの終了後も景気回復基調が継続すると徐々に買い戻しが入ると予想。							

甲斐	ベア	1.1300 ～ 1.1150	オミクロン株による感染拡大は継続するものの、重症化リスクが限定的となる中、緩やかなリスクオン相場が継続すると予想。22年中の利上げ時期前倒しなどが意識される中で、欧米中銀のスタンスの差がからドル買いが進行すると思われる。
小野崎	ベア	1.1500 ～ 1.1000	米欧の金融政策の違いにEURは重い展開か。ただし、1.10手前からは押し目買いを狙う動きも想定されることから下値は1.10までと見たい。
玉井	ベア	1.1450 ～ 1.1150	米早期利上げが改めて意識されやすい局面となりそうで、金融政策の違いからユーロは上値の重い動きを予想する。ただ欧州もインフレ圧力が高まる中、緩和縮小観測も広がり下値は限定的だろう。
原田	ベア	1.1450 ～ 1.1150	オミクロン株の感染拡大は欧州圏でも広がっており、ホリデーシーズンを終えて、さらなる感染拡大も懸念される。また、エネルギー価格の高止まりによるスタグフレーションも懸念される中、ユーロを買う動きは限られよう。
大庭	ベア	1.1400 ～ 1.1150	軟調な展開を予想。11月に1.12台を割り込んだ後、12月は戻されるも1.13に届かず、上値の重い展開だった。米国では早ければ22年前半にも利上げ開始が視野に入っており、金融政策の乖離からユーロは軟調地合いを想定。
上遠野	ベア	1.1400 ～ 1.1200	オミクロン株に関してはその弱毒性やワクチンへの期待感が燃るも、欧州域内で急拡大するコロナ新規感染者を受け、行動規制なくとも消費者心理の悪化は否めず。年始ロシア動向も警戒される中、ユーロは引き続き上値重い展開を予想。
小林	ベア	1.1450 ～ 1.1000	FRBによる早期利上げ観測が持ち上がっている一方で、ECBにおいてはハト派な要人発言が相次いでおり、金融政策の方向性の違いにより、ドル対比ユーロの軟調推移を予想。
逸見	ベア	1.1500 ～ 1.1000	オミクロン株の感染拡大による不透明感は根強く、ECBのタカ派化は限定的。一方で米国では早期利上げを視野に入れており、金融政策差からユーロは軟調地合いを想定。
大谷	ベア	1.1400 ～ 1.1150	欧州各国ではコロナ感染者数が高止まりしており、景気回復ペースの鈍化懸念が高まっている。金融政策についても、ECBは2022年の利上げ開始を否定する姿勢を維持しており、引き続きユーロは上値重い推移を予想する。
鈴木	ベア	1.1450 ～ 1.1150	欧州各国でロックダウンの強硬措置が取られる等、感染者の拡大を背景とした経済停滞懸念が再燃。中銀の金融緩和縮小に対する差も要因となり上値の重い推移となるか。
大熊	ベア	1.1500 ～ 1.1200	感染拡大は深刻化しているが、オミクロン株の重症化リスクは低いとの見方が太宗な為、リスクオンの流れになりやすい。しかしECBによる金融正常化がFRBに遅れを取っていることは否めず、ユーロは底堅いものの上値重い推移を予想。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3100 ~ 1.3900
GBP/JPY 150.00 ~ 159.00

欧州資金部 神田 史彦

■ 先月の為替相場

先月のポンドは序盤の低迷から終盤にかけて反発する展開。月初よりポンドは弱含み。対ドルで1.33近辺で始まったが、3日の米雇用統計を受けた堅調なドルに押され1.32台前半へ下落。その後は1.32を挟んだ値動きが続き8日には1.3162の月中安値をつけた。その間、オミクロン株懸念が英中銀の利上げ期待を抑制した可能性もあったし、英国内では首相チームの不祥事(昨年の英ロックダウンの最中に首相官邸でクリスマスパーティが開かれた)への突き上げで内閣の信任不安があった。ただ、ポンドはそこから値崩れせず12カ月安値水準で横ばい。月足の50日線が1.32レベルであったこともサポートか。月後半にかけての反発の一因となったのは16日の英中銀の予想外の利上げだろう。その週は各国中銀の政策決定が相次いだ、オミクロン株をそこまで危険視しないという姿勢を英中銀もと、敢えて15ベースス利上げで政策金利を0.25%とした。ポンドは1.33台後半まで上昇したが、勢いは続かず翌週20日には再び1.32台を一時割り込む。しかしポンドはそこから再び切り返すと年末に向けては一本調子で値を戻す展開に。その間、英国は22日に初めて1日のコロナ感染者数が10万人を超えたものの、英政府がロックダウンを否定していること、さらに金利市場での来年の英利上げの織込み度が上がったことが話題となっていた。31日にそこまでの月中高値1.3550をつけ、高値圏で年越しとなった。

■ 今月の見通し

ポンドは利上げ期待を睨みながらの展開で、方向感の出にくい推移を予想。まず英中銀のタカ派姿勢が他主要中銀から抜けていることはもちろんポンド支援要因だが、市場が既に相当程度織込んでしまっているため上値余地は限定的となりそう。12月末時点のOIS(翌日物金利スワップ)市場では、2月3日会合時点でもう1回15ベーススの利上げを既に見込んでいる。少なくともこの期待維持がポンド上昇の十分条件となる。(なお、1月は英中銀の金融政策委員会が予定されていない。)その最大の不透明要因はコロナの状況となる。すでに英国内ではオミクロン株が主流となっており、12月最終週には1日の感染者数が18万人を超えている。ジョンソン内閣は行動制限の再導入には否定的だが、スコットランド、北アイルランド、ウェールズでは行動制限が再導入されており、残すはイングランドのみとなっている。英政府はブースター接種(3回目接種)を推し進めているが、現時点ではオミクロン株は重症化せずに同ブースターで制御可能との見方も多いが、今後の展開次第では英中銀シナリオが流動化する。これに次いで英国内での不安要素はジョンソン首相の支持率か。そもそも内閣が行動制限を課せないのは首相が与党内をまとめられないから、との声も聞かれる(ちなみに某英ブックメーカーでは2022年内のジョンソン首相退陣のオッズは約55%)。もちろん政治不安はポンド安要因となる。最後に通貨オプション市場での1カ月インプライドボラティリティは±約1.5%程度の変動を見込んでいそう。リスクリバーサルでは依然プットオーバー(プットオプションのボラティリティの方が高い)であるところをみるとオプショントレーダーたちのポンドへの見方は特段強気に変った様子はない。先月の利上げ後にすぐに上昇分をはき出した動きが象徴するようにポンドの上昇余地にはやや懐疑的な見方があるようだ。

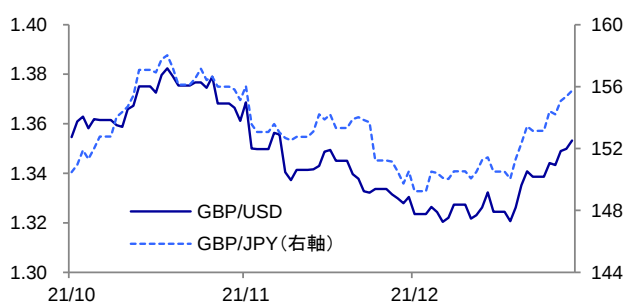
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』

健康食からはずれてしまうのだが、先日1週間のスペイン旅行中に、毎日タバコと酒という食事に胃が疲れてきたためにもっと野菜を食べたいという話になった(朝から酒浸るのをやめようという話にはならなかった)。そこで、最近増えてきているヴィーガン系のレストランを試してみるのはいかがでしょうか、ということになった。最近よく耳にするこの「ヴィーガン」、実は発祥の地はイギリスで、19世紀くらいから既にあったようだ。日本語では完全菜食主義者などと訳すが、食事だけでなく生活スタイルを指す。これはつまり食べ物に限らず身に着ける物まで含まれる。そのため、こちらでは例えば手袋を買うときにもヴィーガンにふさわしいかどうかの記載が見られる。こちらでもレストランを探すときなどは、やはりウェブ上の口コミは1つの情報ソースである。見てみると、全般的に美味しいとの評価を得ているレストランだが低評価も散見されるものがあつた。その内容を見てみると「ヴィーガン向けのメニューがない」とのこと。なるほど、レストランを味で選ぶ時代は終わりが来るのかもしれない、と驚いたのを覚えている。なお、ロンドンにも工場で作ったパティ(野菜由来)を使ったハンバーガーを販売するカフェができてきている。ヴィーガンでない方も、コロナが収束した暁には一度本場イギリスで試してみたいだろうか。

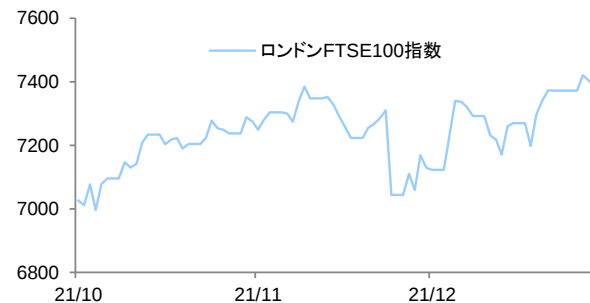
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	58.2	58.1	58.1
12/3	サービス業PMI	11月	58.6	58.5	58.5
12/6	建設業PMI	11月	54.2	55.5	54.6
12/10	GDP(前月比)	10月	0.4%	0.1%	0.6%
12/10	鉱工業生産(前年比)	10月	2.2%	1.4%	2.9%
12/14	ILO失業率	10月	4.2%	4.2%	4.3%
12/15	消費者物価指数(前年比)	11月	4.8%	5.1%	4.2%
12/16	英中銀政策金利		0.10%	0.25%	0.10%
12/16	製造業PMI	12月	-	57.6	58.1
12/17	小売売上高(含自動車/前年比)	11月	4.2%	4.7%	-1.5%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7100 ~ 0.7400
AUD/JPY 81.80 ~ 85.30

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

■ 先月の為替相場

1日、豪Q3GDPが予想ほど悪化しなかったことから豪ドルは下値が支えられたものの、前日のパウエルFRB議長によるタカ派発言を受けた流れで米株が続落すると豪ドルも反落して0.71近辺まで下落。3日、米11月雇用統計で、雇用者数の伸びが予想を下回ったものの、失業率、労働参加率ともに改善したことで、豪ドルは昨年11月来の安値0.6933を付けた。6日、ファウチ米国立アレルギー感染症研究所所長がオミクロン株の重症度判断を巡り、楽観的な発言をしたことから、リスクオフムードが若干後退。更に、中国民銀行が銀行の預金準備率の引き下げを発表したことも支援材料となり、豪ドルは0.70台半ばまで上昇。7日、RBA声明文で、オミクロン株による景気腰折れは想定せずとの記述に加え、2022年前半までにデルタ株前の景気回復軌道に戻ると予想。これが若干タカ派のとりえられ、豪ドルは買いで反応。オミクロン株に対する既存ワクチン有効性に関するポジティブな報道を背景に株価が上値を追う中、豪ドルは0.71台前半まで上昇。

10日、米11月CPIが警戒されていた程強い結果では無かったため米ドル売りが強まり、豪ドルは0.71台後半へ。15日、FOMCがテーパリングを加速を決定し、ドットチャートでは来年の利上げ予想中央値が3回に。経済見通しでも米景気回復について楽観的な見通しが示されたことで、株価は大きく上昇。豪ドルは週初弱含んでいたものの、この日再び0.71台後半に。16日、豪11月雇用統計の結果が予想以上に堅調だったことから小高く反応。BOEが予想外の利上げを発表すると、英ポンドが大きく上昇、米ドルが下落する動きを受けて、豪ドルは一時0.72台前半まで上昇。

20日、オミクロン株感染拡大を受けて一部の国で行動制限が強化される動きを背景に、リスクセンチメント悪化から豪ドルは一時0.71台割れ。バイデン米大統領が成立を目指す税制・支出法案に民主党のマンチキン議員が明確な反対を表明したことで、株安が進行したことも豪ドルの重しとなった。22日、バイデン米大統領が、マンチン上院議員と合意の可能性があるとの見解を示したことや、オミクロン株の重症化リスクに関して楽観的な報道が相次ぎ、リスク選好の流れに。豪ドルは0.71台半ばまで上昇。23日、米Q3GDPが上方改定されたことに加え、米12月コンファレンスボード消費者信頼感指数が市場予想を上回ると株価が上昇幅を拡大、米ドル下落。豪ドルは0.72台前半までで上昇。その後、米株価が回復する中、豪ドルは底堅い値動きで0.72台半ばを維持して年越し。

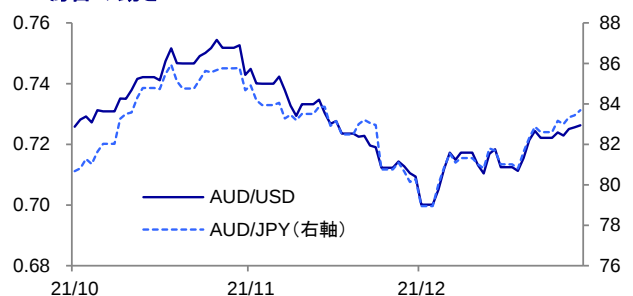
■ 今月の見通し

1月の豪ドルは底堅い値動きを予想する。

12月RBAではオミクロン株は景気回復を妨げるものではないとの見解を示した上で、先行指標は労働市場の力強い回復を示していると、タカ派的な印象を与えた。ロウRBA総裁は12月中旬の講演でテーパリングを巡る選択肢として(1)5月終了、(2)5月にテーパリング速度の見直し、(3)2月終了、を示し、現在のメインシナリオは(1)5月終了との見解を示している。RBAは1月に会合が無く、次回会合は2月となる為、来年1月25日に発表される豪Q4CPIの結果が、RBAによるテーパリング判断の大きなカギを握ることとなる。豪Q4CPIの結果が予想以上に上振れた場合は、テーパリングの2月終了が現実味を増し、豪ドルは上値を追う展開となろう。ただし、テーパリング終了直後から利上げが想定される米国とは違い、RBAが想定している利上げタイミングは少なくとも来年中ではないことを勘案すると、極端に豪ドルが買い進まれる状況は想定しづらい。いずれにせよ、米・豪インフレ動向が両国の金融政策のカギとなり、来年の豪ドル相場の大きなテーマとなろう。尚、オミクロン株を巡り重症度やワクチンの有効性に関して楽観的な報道が増えてきており、リスクムードが回復してきているが、豪州では新規感染者数が過去最高を更新しており、こちらの進展に関しても、引き続き注意を払いたい。

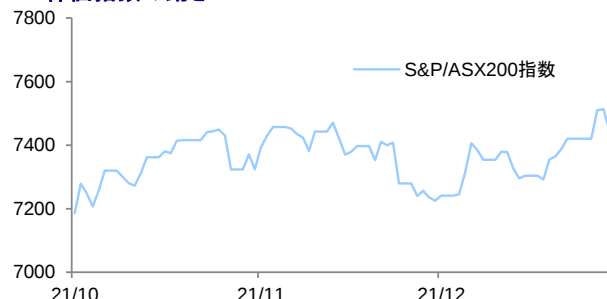
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	GDP (季調済/前期比)	3Q	-2.7%	-1.9%	0.7%
12/1	GDP (前年比)	3Q	3.0%	3.9%	9.6%
12/2	貿易収支 (A\$ mn)	10月	11,150	11,220	12,243
12/7	住宅価格指数 (前期比)	3Q	5.0%	5.0%	6.7%
12/7	住宅価格指数 (前年比)	3Q	21.7%	21.7%	16.8%
12/7	豪州準備銀行理事会	12月	0.1%	0.1%	0.1%
12/16	失業率	11月	5.0%	4.6%	5.2%
12/16	労働参加率	11月	65.5%	66.1%	64.7%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2400 ~ 1.3000
CAD/JPY 86.00 ~ 92.00

米州資金部カナダ室 金本 玲子

■ 先月の為替相場

12月USD/CADは1.2751でオープン。月初はオミクロン株への警戒感の高まりからリスクオフムードとなったが、オミクロン株の弱毒性が報じられると、徐々に安心感が広がった。原油価格の回復と堅調なカナダ経済指標を材料に、カナダドルが強含みで推移する展開となったが、FOMCでのタカ派スタンスがUSDドル高を助長、また欧米を中心とした感染者急増の報道に、USD/CADは1.29台半ばまで上昇した。月間高値は1.2964(12/20)、月間安値は1.2608(12/8)。

2日米国の石油戦略的備蓄放出計画や、OPECプラス会合で増産維持が合意されたことにより、原油が一時62.43ドルまで下落。1.2830台までカナダドル売りが進む。

3日発表の米雇用統計では、11月の非農業部門雇用者数が予想を大幅に下回り、市場はUSDドル売りで反応。一方のカナダ雇用統計は失業率が6%に低下し、雇用も6か月続けて増加。原油が69.22ドルまで回復したことも相まって、カナダドルが1.2744まで買われた。しかし、オミクロン株感染者急増の報道により、リスクオフムードが再燃するとUSD/CADは1.28を上抜け1.28台半ばへと推移した。

7日にかけて、オミクロン株への懸念が後退し始めると、原油は73.03ドルまで上昇。また、カナダ10月貿易収支が輸出、輸入共に2か月ぶりに拡大。カナダドル買い優勢となり、USD/CADは1.27を下抜け1.2635をつける。8日カナダ中銀金融政策決定会合では、早期利上げ観測に一時は1.2608までカナダドル高へと動いた。しかし金利据え置きが決定されると、やや粗い値動きを見せた後、1.26台半ばへと落ち着いた。その後はオミクロン株感染者増加の報道や、FOMCを控えUSD/CADは1.28へと上昇。15日のFOMCでは量的緩和縮小ペースの加速や2022年3回の利上げ予測などが示された。利上げ見通しへの不透明感が消えたことで、USD/CADは更に上昇し、1.2937をつける。その後は米金利低下や、米新規失業保険申請件数などの米経済指標の軟調な結果を受けて、USD/CADは1.276まで値を下げる。20日オミクロン株の拡大により世界で規制強化の動きが強まるとの報道が伝わると、株は売り注文が膨らみ、原油も66.04まで反落。USD/CADは月間高値の1.2964まで上昇。月末、市場のオミクロン株への警戒感が緩和され、年末の薄商いの中USDドル売りが優勢となり、1.27を下抜けた後1.2648でクローズした。

■ 今月の見通し

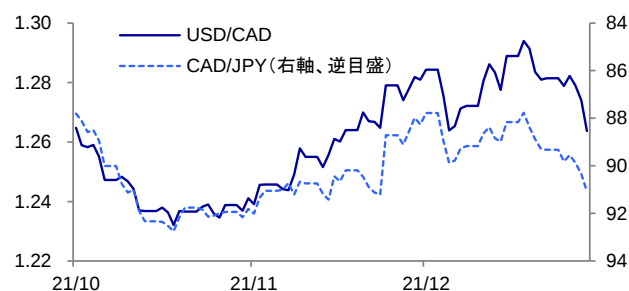
カナダでも年末に向けオミクロン株の感染者は急速に増加した。新規感染者数は過去最高を記録しており、ホリデーシーズンでの更なる増加が懸念されている。感染対策として3回目のワクチン追加接種も始まり、各州では行動規制強化が施行された。感染者数が特に多いケベック州では在宅勤務が要請され、レストランやバーでの人数制限などが導入されている。しかしオミクロン株による病状は軽症であるとの報道や、南アフリカでは感染者数がピークアウトしたとの実例があることから、オミクロン株による経済回復への影響は限定的だとの見方もある。カナダ中銀はオミクロン株の拡大によるサプライチェーンの回復の遅れが、経済成長の妨げになるとしつつも、雇用がバンデミック前の水準まで回復し、賃金の伸びも加速していることから、カナダ経済の回復が続くとの楽観的な見解を示している。加速するインフレ率に関しては、2022年上半年期まで継続するが、年末には2.1%に落ち着くとの予想が示された。今月26日にカナダ中央銀行金融政策決定会合が開かれる。4月の利上げ実施を示唆したフォワードガイダンスと、タカ派姿勢は維持されると思われる。しかし市場では2022年に5回の利上げがあるとの見方があり、1月の利上げ観測が徐々に高まってきている。会合前後での粗い値動きも予想されるので、注意が必要だ。FRBは12月のFOMCでテーバリングを2022年3月に終了させ、第二四半期、早くとも5月に利上げを実施する可能性を示した。今のところはカナダが米国より先に利上げに踏み切る可能性が高く、短期的なカナダドル高進行もあり得る。しかしFRBメンバーから、3月に利上げを行う可能性があるとの発言もあり、利上げ時期の不透明感が相場の重石となると思われる。原油に関しては、オミクロン株の感染拡大状況による需要減の懸念から、価格の下振れが予想されるが、産油国の協調体制が維持されているので、増産量は調整され下値は限定的になると予想。「OPECプラス」の次回会合は4日に予定されており、日量40万バレルの増産が維持されるかどうか注目が集まる。年明けのオミクロン感染拡大状況によって、各地で更なる規制強化や都市封鎖が実施されれば、リスクオフへと振れることも考えられるが、市場ではオミクロン株への警戒感が後退しているので上値は重いと思われる。コロナ感染拡大状況、原油市場、対中関係などに注目しつつ、1月のUSD/CADは1.23-1.29での推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』
カナダではオーガニックや健康食品を扱った専門店が多く見られます。地元の新鮮な野菜やくだものが購入できるファーマーズマーケットも多くあり非常に便利です。ここ数年ではビーガンやベジタリアンなどが増加傾向にあり、スーパーなどでは個人の健康志向に合わせた品ぞろえが拡充されつつあります。植物性たんぱく質を含む大豆などから作られたソイ・ミートの売れ行きが好調で、カナダ政府もおおよそ1億カナダドルをソイ・ミートなどのビーガンプロテイン産業に投じて力を入れています。スーパーマーケットで卵を買うにしても、スタンダード・ホワイト、スタンダード・ブラウン、オーガニック、フリーレンジ(放し飼いで育てられた鶏が産んだ卵)、フリーラン(小屋の中で放し飼いで育てられた鶏が産んだ卵)、ビタミンを強化した卵、オメガ3を強化した卵など、種類がとても豊富です。同じように牛乳にもたくさんの種類がある中、植物性ミルクもソイ、アーモンド、ライス、ココナッツ、オーツなど年々増えており、それらが冷蔵コーナーでひしめき合っている状況です。そんな中、2022年には新たな植物性ミルク「ポテトミルク」がカナダに上陸し、ブームになるのではないかと言われています。「ポテトミルク」はその名の通りジャガイモから作られたミルクで、栄養が豊富。それだけではなく、製造過程における温室ガス量と水の消費量も少なく済み、環境を重視した今の時代にピッタリだと評判になっているようです。レストランも健康志向の人たちが増えた事で、オーガニックやローカルの食材を使った質の向上が見られます。量も昔に比べると、ずいぶん適量になったと感じます。また、サステナブル・シーフードのように自然環境を考慮した形で捕らえられた魚を使っているところもあります。コロナ禍で人々の健康への関心は益々高まっています。2022年は当地でも食の多様性と食のサステナビリティに注目が集まるようです。

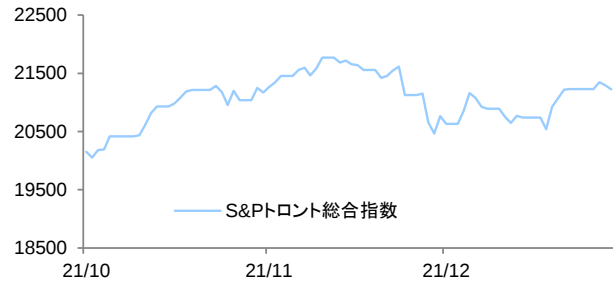
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/3	雇用ネット変化	11月	37.5k	153.7k	31.2k
12/3	失業率	11月	6.6%	6.0%	6.7%
12/7	貿易収支	10月	2.08b	2.09b	1.42b
12/8	カナダ中銀金融政策決定会合		0.25%	0.25%	0.25%
12/15	新規住宅着工件数	11月	235.0k	301.3k	238.4k
12/15	製造業出荷	10月	4.1%	4.3%	-3.0%
12/15	消費者物価指数(前年比)	11月	4.7%	4.7%	4.7%
12/21	小売売上高	10月	1.0%	1.6%	-0.3%
12/23	GDP前年比	10月	3.6%	3.8%	3.4%
12/23	GDP前月比	10月	0.8%	0.8%	0.2%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1170 ~ 1220
 KRW/JPY 9.434 ~ 9.901
 JPY/KRW 10.100 ~ 10.600

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

12月のドル/ウォン相場は方向感に乏しい展開となった。11月30日海外時間に感染力が強いとされるオミクロン株の感染拡大懸念が後退し、ドル売りとなる中、1日は1,184.4でオープンした。1日、2日は市場全体でドル高となる中、韓国株式にも外国人投資家による買いが入り、ドル/ウォンは1,175.1まで下落した。しかしこの水準では押し目買いが入る展開となった。3日はFed高官達の利上げ早期化を指摘するタカ派発言によって1,177.5ウォンでオープンし、その後も実需のドル買いに支えられてドルは比較的堅調に推移したが、米雇用統計を控えて強い方向感はず、1,180付近で小幅な値動きに終始した。翌週6日は1,184.0ウォンでオープンし、週前半は先週から継続している外国人投資家の株買いで連日KOSPIが上昇すると、ドル/ウォンは上値重く推移した。その後、8日海外時間にオミクロン株による重症化の可能性が低いとの報道を受けリスク性資産に買い戻しが入るとドル/ウォンは9日に月安値1,172.8まで下落した。しかしその水準では押し目買いが入り反発。続く週末10日は米11月CPIを控えて全体的にドル買いとなる中で1,180ウォンを上抜けた。翌週13日は1,180.1オープンし、15日にかけてはFOMCを控えたドル買いに引っぱられる展開。FOMCは市場の予想通りの結果となり、16日も1,183.9ウォンと前日クローズとほぼ変わらずでオープンした後も材料出尽くし感からドル/ウォンはやや反落。その後週末にかけ特段注目されるイベントに乏しい中、ドル/ウォンは方向感に乏しい展開となった。翌週20日は米国内のオミクロン株の感染者増加に伴う米株の下落を受けてリスクオフのドル高が進み1,189.0ウォンでオープン。その後は、年末にかけ機関投資家による投機的なフローが先細る中、ドル/ウォンは実需のウォン買いと市場全体でのドル買いに挟まれ動意に乏しい展開が継続。30日の取引最終日まで同様の流れとなり、結局前月末比0.9ウォン上昇した、1,188.9ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

1月のドル/ウォンは底堅い展開を予想する。12月は大台の1,200には届かなかったものの、期末月で実需のウォン買い取引が多い12月でもドル/ウォンは底堅く推移したことから、潜在的なドル/ウォンの上昇圧力を再確認する月となった。

1月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。

①米FRBによる政策(利上げ時期)への検討 ②BOKによる金融正常化への道筋

①ここもとの米インフレ高進を受け、12月のFOMCではテーパリングの加速が決定した他、パウエルFRB議長は”高インフレは現時点では持続的ではないが、定着しないよう全てのツールを用いて対応”と発言しており、FOMC参加者による利上げ回数見通しの中央値は2022年に3回となっている。一方で市場参加者による政策金利見通しは、FRBの予想よりも低くなっており、FRBによる利上げ見通しに懐疑的な見方を示している一方で、利上げを急がせる根拠となるインフレ率は高止まりしている。かかる状況下、1月に入り市場参加者がFRBの予想に歩みよると市場全体でのドル高、FRBが市場参加者の予想に近づくとドルニュートラルになるのではなかろうか。短期的にはドル安になる材料に乏しく、ドル/ウォンの上昇要因となろう。

②25bpの利上げが行われた11月BOK会合では、BOK総裁から今後の利上げはコロナ感染状況次第との発言があった。その後残念ながら韓国ではコロナ感染が広がり、再び厳しい行動制限が導入されている。かかる中、韓国の金融政策からくるウォン買い圧力は鳴りを潜めるだろう。

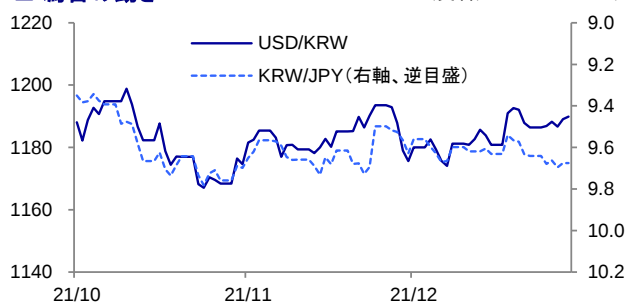
繰り返しながら、12月のドル/ウォンは方向感に乏しい展開となった。1月もウォン固有の材料が市場での注目を浴びにくい中、同様な状況が継続する可能性も相応にあると思われる。しかし、市場全体でのドル買いが期待できる中、ドル/ウォンの値幅は伸びなくとも底堅い動きになるのではなかろうか。節目の1,200を越えると当局による介入の可能性あり一方向での上昇は期待しにくいものの、それでも上方向に警戒したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』
 当地の健康食ですが、当地ならではのとなるとまずは朝鮮人参でしょうか。サムゲタンという滋養に良いとされる料理に入っているほか、手軽なものとしてはジュースタイプのもも売っており、精力剤として飲んでいる方は結構います(私も飲みました。味は。。。聞かないでください)。そのほか、野菜ジュースや青汁のようなものも売っており定期的に飲んでいる方はいます(こっちは日本と同じ味です。大丈夫です)。ダイエット食品も対象に含めると、美容大国韓国なだけあり、コンビニにはたくさんの商品が取り扱われております。しかし、味は正直厳しいものがあります。良薬は口に苦しなのでしょうか、味を犠牲にしてダイエットにのみ特化しております。韓国に着任して何もわからなかった頃にコンビニで間違えてダイエット用のヨーグルトを買ったときは悲惨でした。今でもそのヨーグルトの広告を駅で見ると胸が震えます。最近では日本へも朝鮮人参の栄養ドリンクが輸出されており、日本のE-サイトでも購入することができます。朝鮮人参をそのまま購入するよりは価格もリーズナブルなので、ぜひ試してみてください。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	輸出(前年比)	11月	27.2%	32.1%	24.2%
12/1	輸入(前年比)	11月	39.6%	43.6%	37.7%
12/1	貿易収支	11月	\$2,000M	\$3,087M	\$1,826M
12/2	GDP確報(前年比)	3Q	4.0%	4.0%	4.0%
12/15	失業率	11月	3.3%	3.1%	3.2%
12/28	消費者信頼感指数	12月	-	103.9	107.6
12/29	景況判断(製造業)	1月	-	92	88
12/29	景況判断(非製造業)	1月	-	78	83
12/30	鉱工業生産(前年比)	11月	3.4%	5.9%	4.5%
12/31	CPI(前年比)	12月	3.7%	3.7%	3.8%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 27.60 ~ 27.85
TWD/JPY 4.07 ~ 4.20

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

12月のドル/台湾ドルは下落

月初の12/1は27.800でオープン後、台湾株がじり高の展開となるも27.73付近での推移が続いたが、外国人投資家の株を売り越す場面もあり、27.78付近まで上昇。しかし、その後はオミクロン変異株への警戒感が和らぎ、台湾株の上昇が継続する中、輸出企業のドル売りも加わり、27.67付近まで下落。

月央に入ると、FOMCを控えているものの、英国でのオミクロン変異株での死亡者を確認との報道からリスクオフの流れとなり、台湾株が下落。台湾ドルも売りが優勢となり、27.84付近まで上昇し、その後も27.8台での推移が続き、一時27.860まで上昇。

月後半に入ると世界的にオミクロン変異株の重症化率は低く、経済活動への影響は限定的との見方が強まりリスクオンムードとなり、台湾株が連騰する展開に加え、年末の輸出企業のドル売りも加わり、台湾ドル高の流れに。12/24に台湾加権指数が約5か月ぶりに18,000ポイントをつけ、12/27には過去最高値を更新すると、ドル台湾ドルも27.70割れに。その後も台湾加権指数が最高値の更新を続けると台湾ドル買いが優勢となり、一時、27.631まで下落したが、年末には調整も入り、27.69付近で2021年の取引をクローズ。

■ 今月の見通し

1月のドル/台湾ドルはレンジ相場を見込む。

12月はオミクロン変異株への過度な警戒感が和らぎ、リスクオンの流れから台湾株高台湾・ドル高となったが、2021年を振り返ってみると、前半こそ台湾ドル高が進行したものの、後半はレンジでの推移に留まった。2020年と同様に2021年も輸出は好調で7月以降は単月ベースでの輸出額の最高額を更新し続けたが、同時に輸入も拡大しており、資源高となる中、2021年12月時点では2021年の貿易黒字の拡大は緩やかになったと想定される。2021年も歴史的な台湾ドル高となった2020年と同水準以上の台湾ドル高圧力があつたにも関わらず、2021年後半はレンジ相場となったのは、米国の金融正常化への期待から米金利が上昇したことで、台湾からの海外投資が拡大し、台湾ドル高圧力を相殺したことが最大の要因であった。

2022年については、台湾の主力輸出品である半導体への世界的な需要は変わらずとの見方から貿易黒字は維持される一方、金融正常化が進む米国の長期金利の状況を見ながら、台湾からの証券投資が続くとみられ、2021年後半と同様に需給が均衡し、レンジでの推移が続くであろう。ただし、オミクロン変異株への警戒は落ち着きあるものの、感染拡大による都市封鎖や新たな変異株の発見等があればリスクオフの流れとなり、台湾ドルは一時的には売られる場面が出てくるだろう。しかし、渡航制限、ロックダウンと経済活動の制限が長期した場合は、台湾ドル高を見込む。米国の利上げ期待が後退することになり、米金利も低下すれば、台湾ドル買い圧力を相殺している海外への投資額が減少する。また、人の移動が制限され燃料需要が縮小すれば、高騰していた原油価格が下落し、輸入額も減少するので、台湾ドル買い材料となるであろう。ただし、台湾が足許、コロナの封じ込めに成功しているが、域内での感染が広まり、半導体製造に影響を及ぼす場合にはその限りではないことには留意したい。

2022年1月については、レンジでの推移をするであろう。2021年の年末にリスクオンの流れから台湾加権指数が最高値の更新を続けたが、さらに上昇するには材料不足と見込む。一方、12月のFOMCで市場の予想通りの金融緩和と縮小の路線が確認されており、米長期金利が上昇しない中では、海外投資が急拡大することもないとみられる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』

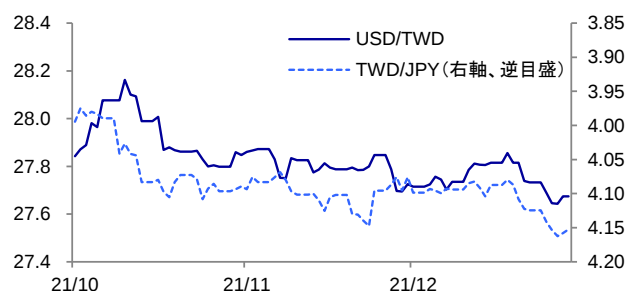
当地の健康食というと、特に目立ったものはありませんが、挙げるとしたら鍋でしょうか。火鍋、酸菜白肉鍋等、薬膳が入ったり、発酵食品を使った鍋があります。ただし、健康を目的に食べているというよりは、「おいしい」+「健康にもいい」といったところでしょうか。

その他では食品ではないですが、健康に気を使っている点では、お白湯があります。エアコンの冷房が効き過ぎるのは他のアジア諸国と同じですが、夏でも冷たい飲み物は体が冷えるのでよくないとの考えから、熱いお茶はもちろんのこと、白湯を飲む人も多いです(特に女性に多いです)。給湯室には給湯器があるのはもちろん、駅にある給水機でもお湯を選ぶことができます。自前の水筒(保温効果あり)を持っている人が多く、これに注いで持ち歩いたり、自席で飲んでます。

なお、台湾には「健康食品管理制度」という、日本のトクホに近い制度があるのですが、ここで認められた保健機能食品には「健康食品」と書かれたマークが付きます。これが、当地の健康食品と呼べるかもしれませんが、日本のトクホのように機能性のお茶のペットボトルがコンビニで売られてます。

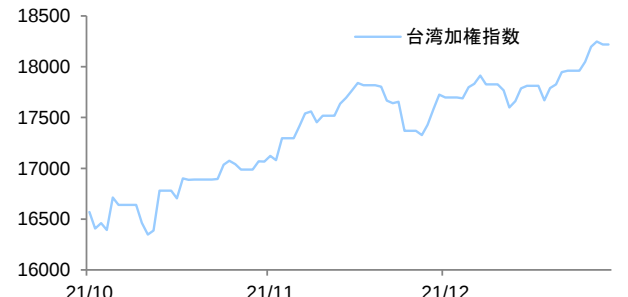
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/6	外貨準備高	11月	-	547.33B	546.70B
12/7	CPI (前年比)	11月	2.60%	2.84%	2.54%
12/7	輸出 (前年比)	11月	22.8%	30.2%	24.6%
12/7	輸入 (前年比)	11月	24.5%	33.8%	37.2%
12/7	貿易収支	11月	5.40B	5.71B	6.12B
12/16	公定歩合	3Q	1.125%	1.125%	1.125%
12/20	輸出受注 (前年比)	11月	5.2%	13.4%	14.6%
12/22	失業率	11月	3.80%	3.71%	3.84%
12/23	鉱工業生産 (前年比)	11月	9.90%	12.19%	11.60%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7800 ~ 7.8200
HKD/JPY 14.40 ~ 14.90

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【12月の香港ドル直物相場】

12月の香港ドル直物相場は、米国において米国連邦準備理事会(FRB)が一段とタカ派色を強めたことを背景に7.80近辺で推移した。FRBは12月のFOMCでテーパリングのペースを2倍に速める決定を下し、政策金利見通しにおける中央値は2022年と2023年のそれぞれで3回の利上げ予想を示す結果となった(1回当たり25bpsと仮定)。FRBの早期利上げ観測の高まりは米ドル・香港ドルの金利差を拡大させ、香港ドルの下押し圧力として働いている。また、中国の不動産開発業者は資金調達難が続いており、債券のデフォルトが増加している。負債を抱える中国の不動産開発業者の一部は米ドル建債務の利払い資金確保の為、香港にて所有している不動産の売却を行っており、その結果米ドル買い・香港ドル売りのフロー増加にも繋がった。株式市場に目を向けると、中国政府によるハイテク企業への取り締まりや米国による制裁リスクが意識され、ハンセン株式指数は続落したものの、年末におけるストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)を通じた香港株式市場への累計資金流入額は年初来で4,500億香港ドル近辺まで回復した。12月のIPOフローも香港ドルの下支えとなり、12月下旬には香港ドルの直物相場は7.80を下回る水準で推移している。また米ドル・香港ドル金利差の拡大期待を背景に、USD/HKDの長期のディスカウント幅が拡大した。

【12月の香港ドル金利市場】

香港ドルの短期金利は、FRBのタカ派シフトと年末の資金調達圧力の高まりを受けて上昇した。加えてHKMAが為替基金証券(EFBNs)の増発を通して市中の香港ドル流動性吸収を拡大させたことも、金利上昇圧力となった。香港ドルの市中流動性は引き続き潤沢な状況を保っているものの、結果的にHKMAのアグリゲートバランスは3,775億香港ドルまで減少した。1か月物HIBORは0.2%、3か月物HIBORは0.25%付近までそれぞれ上昇しており、香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差は、3か月物については、米ドルLIBORが上昇したことで縮小しているものの、1か月物では9bpsまで拡大した。市場参加者がFRBの一段の利上げサイクルの前倒しを織り込んだ為、米ドルベッグ制の下、香港ドルスワップ金利は3年物で1.1%、5年物で1.3%まで上昇した。香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップレート)は-90bps近辺で推移している。

■ 今月の見通し

【1月の香港ドル直物相場】

1月の香港ドル直物相場は、7.78から7.82のレンジ内で推移するものと予想している。FRBが金融政策の引き締めを進めていく過程で、一段とキャリートレード(米ドル買い/香港ドル売り)が増えていくと思われるが、実際に利上げが開始されるまでは7.80近辺で上下する動きとなるだろう。強いインフレ圧力を背景に、今回の利上げ局面は、2015年12月からスタートした前回の利上げ局面と比較して速いペースになると考えられている。しかし、香港においては、HKMAが流動性の吸収を加速させない限り、市中銀行が金利を引き上げる可能性は低い。米ドルと香港ドルの金利差はしばらく拡大したままになると予想され、引き続き香港ドルへの下押し圧力となるだろう。また、香港の株式市場への資金流入は、現在の株式市場の弱気相場が反転するまでは引き続き低調なものになると予想されている。米国で上場廃止になった中国企業による香港でのIPO活動が増えていけば、短期的には香港ドルの下支えとなる可能性はあるものの、香港ドル直物相場がベッグ制の下限である7.85に向けて、中期的に下落していくトレンドは変わらないものと考えている。

【1月の香港ドル金利市場】

HKMAによるEFBNsの追加発行を考慮すると、HKMAのアグリゲートバランスは2022年の2月には3,375億香港ドル近辺まで減少すると予想されている。しかし、この水準は引き続き流動性が潤沢な状況とみなせる。年初からの香港ドル短期金利は、年末の資金調達需要剥落を受けて低下する可能性が高い。2015年の前回利上げ局面を振り返ると、利上げ開始直後は市中銀行が金利引き上げを手控えていた。今回についても潤沢な流動性の下、同様の動きが予想されており、金利はしばらくの間据え置かれると予想している。将来的な金利上昇リスクのヘッジに向けたフロー増加を受けて、スワップ金利は明確に上昇し始めており、2022年にFRBが実際に利上げを開始すれば、カーブ全体に金利上昇圧力がかかることが予想される。しかし、長期のスワップ金利に関しては、FRBが一段とタカ派色を強めるか、バランスシート縮小の議論が具体化するまでは、現在の水準で推移するものと考えている。

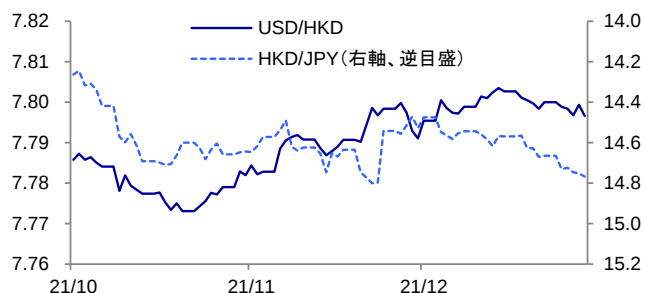
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港の健康食品』

最近、香港の人々の間では健康志向が高まっています。街中のジムも非常に込み合っていますし、健康食品を取り扱うお店も多く見られるようになりました。特に日本の健康食品は香港でも非常に人気があり、公共交通機関の広告でも良く見かけます。一方で、香港における伝統的な健康食品に目を向ける人もいます。例えば体調が優れない時、伝統的なハーブティーである涼茶を街角で飲む人が多いです。特に、「廿四味茶」は、黒色のハーブティーで、苦味が強いものの気分を落ち着かせるのに効果があります。その他、「火麻仁茶」は味もおいしく、消化器官の改善、便秘予防、アンチエイジング、循環器系疾患のリスク軽減等、多くの効果が期待できます。

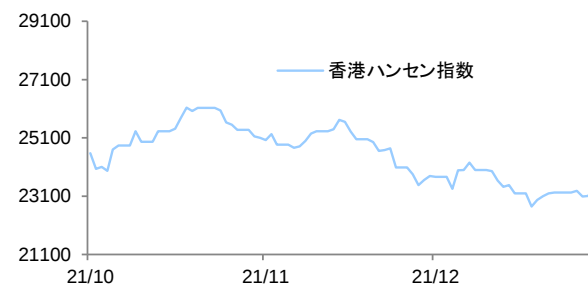
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/3	日経香港PMI	11月	-	52.6	50.8
12/7	外貨準備高	11月	-	\$499.5b	\$498.0b
12/13	鉱工業生産(前年比)	3Q	-	7.8%	5.6%
12/13	PPI(前年比)	3Q	-	-0.9%	2.7%
12/16	失業率(季調済)	11月	4.2%	4.1%	4.3%
12/21	CPIコンボジット(前年比)	11月	1.8%	1.8%	1.7%
12/28	輸出(前年比)	11月	18.0%	25.0%	21.4%
12/28	輸入(前年比)	11月	18.3%	20.0%	17.7%
12/28	貿易収支(前年比)	11月	-\$35.0b	-\$11.6b	-\$30.5b

中国人民幣相場

予想レンジ: USD/CNY 6.3500 ~ 6.5000
CNY/JPY 17.38 ~ 18.58
100JPY/CNY 5.3800 ~ 5.7500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

USDCNYは6.35を下回った後、外貨預金準備率引き上げ発表でレンジに戻す展開。

・11月末、新型コロナウイルスの「オミクロン型」が出現したことでリスクオフムードが強まり、米金利が低下、12月月初は6.3700レベルでオープン。オープン直後に一時5月末以来となる6.35台を付ける。週後半にかけては米金利低下が一服、FRB高官らによる早期緩和縮小に積極的な発言も伝わる中、ドル人民元は下げ幅を回復し、3日は6.37台後半でクローズ。
・6日は6.37台前半で取引を開始。中国人民銀行(PBOC)が預金準備率を0.5%引き下げると発表したことで6.37台後半まで小幅に上昇して反応。7日には再貸付金利の引き下げ(0.25%)と矢継ぎ早に経済支援的な金融政策を打ち出し、その後は人民元買いが優勢となる。8日には6.36台を割り直近のレンジの下限を突き抜けると人民元買いがさらに加速し、18年5月以来となる6.34台まで下落。9日夜にはPBOCが今年2回目となる外貨預金準備率を2%引き上げると発表したことで、6.34台から6.37台まで反転急上昇し人民元高の進行にブレーキがかかった。10日朝には一時6.39台まで付けた。週末にかけては6.37前後で推移し、6日週の下落幅を取戻す。
・13日のドル人民元は10日クローズ対比、やや人民元高の6.36台半ばで取引を開始。FOMCを控えて為替相場は全体的に動意に乏しく、ドル人民元も6.36台を中心に小幅に推移した。15日には事前の発表通りPBOCは預金準備率引き下げを実施。同日発表の11月中国主要経済指標は市場予想下回り弱い結果が多かったものの特段材料視されず。週後半のFOMCをはじめとする主要中銀の会合も予想の範囲内であったことから反応は限定的。17日夕方以降6.38台前半まで上昇。
・20日朝方に発表されたLPR(ローンプライムレート)は1年物が▲5bpsの3.8%に設定された。発表を受けて週明けのドル人民元は人民元安方向にギャップオープンし6.38台後半で寄り付いたが、すぐに先週末終値近辺の6.37台半ばまで下落。材料に乏しく、年末で徐々に薄商いとなる中でドル人民元は小幅な値動きに留まり、下旬にかけては6.37前後での推移が続いた。

■ 今月の見通し

USDCNYは緩やかな人民元安を予想する。

・米中金融政策の乖離拡大 : 米国では2022年3回の利上げが予想されており、物価上昇を背景に着実に金融正常化への道筋が示されている。一方、中国では中央経済工作会议で2022年は経済安定が主要目標として掲げられていることから、PBOCの緩和バイアスは継続すると予想する。米中金融政策の違いがドル高元安をサポートする流れをメインシナリオと考える。

・貿易動向 : 一方で、中国の貿易黒字は足元の人民元高の一要因。企業の外貨預金金額は高止まりしており、人民元買いのフローは引き続き元高要因となると考える。しかし、2022年以降、製造業の生産拠点がコロナ前の状態に戻れば、サプライチェーンが東南アジアに移ることとなるため、貿易収支縮小が相対的な人民元安を誘発すると想定。

・上記に加え、新型コロナウイルス感染状況、米国の対中関税の行方、高止まりするCPI/PPI、国内不動産セクターを巡るニュース、共同富裕を背景とした中国国内のセクター別監督強化は引き続き相場を上下させる要因となり得るため動向には注目したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』

”中国”、”健康”と聞いて私が最初に思い浮かんだのは”漢方”だったのですが、チームの方にこの話をしたら「それは薬でしょ」と却下されてしまいました。

確かに漢方を調べると、漢方薬についての記載であり、”自然界にある植物や鉱物などの生薬を複数組み合わせで作られた薬”であることがわかります。

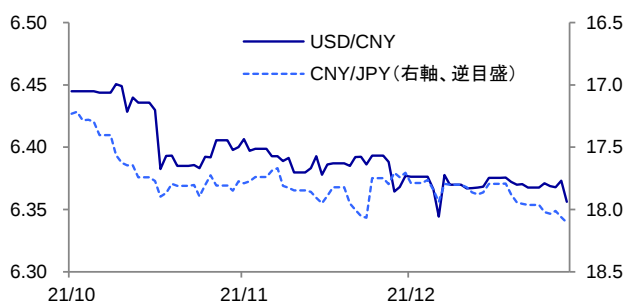
代わりに教えてもらったのが”蒲公英茶”。蒲公英とはたんぽぽのことで、たんぽぽの茎や葉を5cmサイズに刻んで乾燥させたものにお湯を加えて飲むのだそうです。せっかくの機会なので、毎日飲んでいるという方に少し分けてもらって飲んでみましたが、、、とても苦い!! コーヒーの苦さとは違う苦さで、飲む度に草の香りがして、顔をしかめながら飲んでしまいました。ただ、2杯目、3杯目と飲み進めるに連れ、苦味が薄まり香りも和らいで、逆に風味豊かに。身体もボカボカして来て体調が良くなった気がしました(個人の感想です)。

むくみ・冷え性の改善、疲労回復、ダイエット・・・等々、多くの効能が期待できるたんぽぽ茶。日本で販売されているものは他のお茶とブレンドされていて飲みやすくなっているものもあるようです。

是非、一度試してみてください!

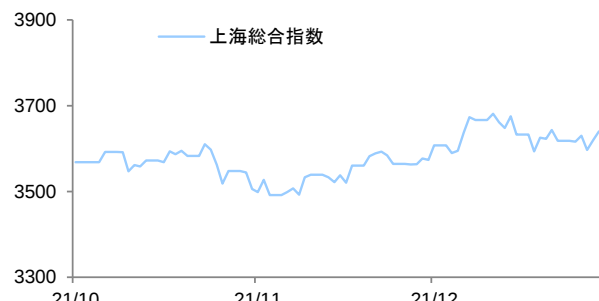
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	財新・製造業PMI	11月	50.6	49.9	50.6
12/7	輸入(前年比)	11月	21.5	31.7	20.6%
12/7	輸出(前年比)	11月	20.3%	22.0%	27.1%
12/9	CPI(前年比)	11月	2.5%	2.3%	1.5%
12/9	PPI(前年比)	11月	12.1%	12.9%	13.5%
12/9	マネーサプライM2(前年比)	11月	8.7%	8.5%	8.7%
12/15	小売売上高(前年比)	11月	4.7%	3.9%	4.9%
12/15	鉱工業生産(前年比)	11月	3.7%	3.8%	3.5%
12/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	11月	5.4%	5.2%	6.1%
12/20	1年物LPR	-	3.85%	3.80%	3.85%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3400 ~ 1.3750
SGD/JPY 83.00 ~ 87.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2021年12月のシンガポールドル(SGD)相場はSGD高が進行。

月初のUSD/SGDは1.37台で推移。前月末、オミクロン株の広がり警戒され株価が軟調となる中、SGDも弱含みに推移していたが、押し目買いから株価が持ち直す動きにつれSGDも上昇。3日にかけて1.36台前半の水準までSGDは上昇。しかしその後、オミクロン株による重症化リスクは限定的との報道により米金利が上昇に転じるとSGDは一転軟調推移となり、7日にかけてUSD/SGDは1.37台半ばの水準まで上昇し、月中高値を付けた。

以降USD/SGDは月末にかけて下落基調で推移(SGD上昇方向)。中国の追加金融緩和に関する発表を受けて人民元が強含みに推移すると、SGDも連れ高に。米国株の大幅続伸も相まって、USD/SGDは1.36台前半の水準までSGD高が進行。10日にかけてSGDは上昇も、その後は再び軟調。英国でオミクロン株を巡り初の死者が確認され、センチメントが悪化した。USD/SGDは1.37台を回復。

22日、欧米株の上昇と共にリスク心理が改善。アジア通貨は上昇となった。背景はトルコ発の預金保護措置を巡る報道やオミクロン株に関する続報。南アフリカの国立伝染病研究所より、オミクロン株の重症化リスクは低い可能性があるとの報告が発せられた。また中国では12月の最優遇貸出金利の引き下げが決定されたことも相まって、SGDは大幅上昇。月末にかけて堅調推移となり、USD/SGDは1.35台前半の水準にて越月となった。

■ 今月の見通し

2022年1月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD安の進行を予想。

MASは昨年10月、市場予想に反し金融政策の変更(SGD高方向)を行った。しかし、市場の中心的なテーマはやはりUSDに関する報道。具体的には、オミクロン株報道後も揺るがないタカ派的なFRBスタンスの今後の行方・動向であり、テーパリング終了見込みや実際の利上げ時期に関する報道が出るにつれ、USD高の進行と共にSGDは弱含みに推移する展開となろう。

前月のSGDは月半ばにかけて軟調に推移。10月、MASによるサプライズとなるポリシーチェンジが行われて以降もSGD安が進行していた格好だが(10月MAS会合以降SGDは約1.2%下落)、これは上述のように、オミクロン株報道後も強い経済指標(特に物価)、好調な企業決算を維持し、金融正常への道を歩む米国の状況を受けて広範の通貨に対しUSD高が進行したためであり、足元のシンガポール経済に大きなダウンスайдリスクはなく、またMASが発表した金融政策変更とも矛盾するものでもない判断する。

実際、12月末にかけては同国の堅調な経済指標内容やハト派的なPBoCのスタンスによる人民元高に後押しされ、SGDは上昇。月を通じSGD高が進行する結果となった。

しかし、このSGD高トレンドは続かないものと予想する。MASは昨年、金融正常化への一步を踏み出したものの、これは先を進む米国の動向・USD高進行に対し、過度なSGD安進行を緩和する程度の影響に留まっている。2022年の前半については緩やかなSGD安・USD高進行が進むものと予想する。

次のMAS会合は2022年4月であるが、まさにこのタイミングは米国がテーパリングを終了し実際の利上げ時期を示唆していくであろう時期であり、おそらくMASは再度のポリシーチェンジを行うであろうものの、USD高圧力が勝る状況となろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

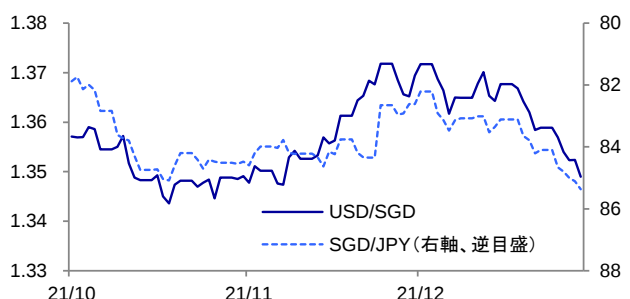
『当地の健康食品』

シンガポールは主に中華系、マレー系、インド系の人々で構成される多民族国家でして、基本的にはそれぞれの民族がそれぞれの文化や伝統、宗教を守って生活しており、文化間の交流は少ないと言われています。ですので健康食品といっても中華系の人には漢方が出てきますし、マレー系ならハーブやサブリ、インド系ならばアーユルヴェーダとなるわけです。そういう意味では、色々な国の色々なものを試せるのがシンガポールの良いところと言えるのかもしれない。

そんな中で今回は非ご紹介させていただきたいのが、「Ghee(ギー)」です。ギーはバターを加熱、ろ過して不純物を取り除いたもので、精製バターとも言われます。消化が良く、ビタミン豊富で免疫細胞を増やす働きもあることから、アーユルヴェーダにおいて最高の万能オイルといわれ、食用だけでなく、美容や医療にも使われるそうです。皆さんもTVで、額にゆっくりと油を垂らす映像をご覧になったことがあるかもしれませんが、その時に使われる油がこのギーです。私は最近までその存在を知らなかったのですが、世界中の健康意識高い層やナチュラルリストの間では有名だそうで、「健康食品50選」としてTIME紙にも紹介されました。シンガポールではスーパーにて1,500円/kgくらいで手に入ります。中身は、チーズのような香りが結構強めですが、口に入れてみても味は全くとれません。ただの油です。バターの代替品として使えるので活躍の場が広く、我が家では料理に使うほか、コーヒーにティースプーン一杯のギーを加えて飲んだりしています。実は上述のTIME紙による健康食品50選では、体に良いスナックとしてポップコーンも選出されており、ポップコーンにギーで作ったら最強じゃない？という事で我が家の定番のおやつになっています。(アジア・オセアニア資金部 深谷)

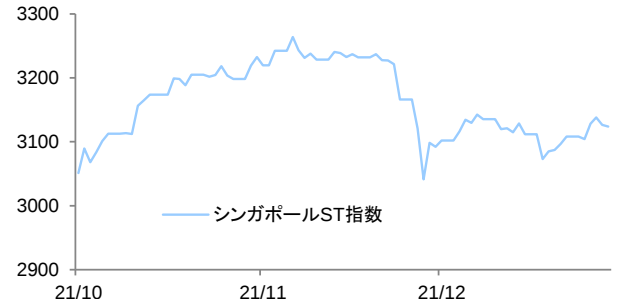
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	購買部景気指数	11月	51.0	50.6	50.8
12/3	小売売上高(前年比)	10月	4.4%	7.5%	6.8%
12/17	非石油地場輸出(前年比)	11月	15.3%	24.2%	17.8%
12/23	CPI(前年比)	11月	3.4%	3.8%	3.2%
12/24	鉱工業生産(前年比)	11月	13.7%	14.6%	17.0%

タイバート相場

予想レンジ: USD/THB 33.00 ~ 34.00
THB/JPY 3.35 ~ 3.50

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 橋 雄史

■ 先月の為替相場

●12月のドルバートは横ばい推移。

月初1日のドルバートは33バート後半でオープン。オミクロン株の感染拡大が懸念され始め、タイ経済の回復が後退することが懸念される中、バートは売り気配でスタート。3日にはアーコム財務省よりオミクロン株の感染が拡大した際には追加の財政出動もあり得ると発言があり、ドルバートは月高値となる34.00を試す場面も見られたが、その後は過度な警戒感が後退したことで反落。7日には中国が預金準備率を引き下げたことで、景気対策期待も意識され、ドルバートは33.50近辺まで下落した。8-9日にはタイの連休に跨る形で動意に乏しく、33台半ばで推移。10日-14日にかけては12月FOMCを前に様子見ムードが続き、小動きの展開が継続した。

15日、注目のFOMCではテーバリングのペース加速に加え、2022年の利上げ前倒しを強める内容になったが、FOMC事前にはパウエルFRB議長がタカ派な発言を見せていたこともあり、相場への反応は限定的となった。FOMC明けの16日は、英国がサプライズ的に政策金利を0.15%引き上げる決定をしたものの、ドルは大きく売り込まれず、ドルバートも横ばい推移。この週は大きなニュースが見られなかったもののクリスマス休暇を控えてマーケットの流動性が低下する中、タイでもオミクロン株の感染が確認されたことで上昇基調で推移。

21日にはタイが外国人観光客の隔離なしの受入停止を発表したこともあり（Test & Goの受付を1月4日まで停止）、22日にかけては、33.80近辺まで上昇。しかし、年末年始の厳格な行動規制の発表は見送られたことでその後は上げ幅を縮小させ、クリスマス休暇前後は33.50近辺まで戻してレンジ推移入り。欧州勢がクリスマスから明けた29日以降は、年末を控えてバートを買い戻す動きが強まり、タイの最終営業日となる30日には月間安値圏となる33.30近辺まで下落。その後は引けにかけて値を戻し、ドルバートは33台半ばで2021年の相場を終えることになった。

■ 今月の見通し

●1月のドルバートは上値の重い展開を予想。

12月のドルバート相場は、FOMCを控えて様子見ムードが強く、短月の値動きとしては70P程度と、比較的狭いレンジで推移した。12月FOMCではテーバリングの加速に加えて、2022年の利上げを3回程度織り込むタカ派な内容となったものの、高止まりするインフレに対して、FEDも出遅れられないというメッセージを感じる結果で、パウエルFRB議長の舵取りはマーケットの期待を巧みにコントロールしているように見受けられる。

タイ中銀の金融政策については、タイ経済の本格的な回復パスが見えてこないこともあり、政策金利は0.50%に据え置かれている。タイ国内のインフレ圧力も欧米諸国と比べるとそこまで高くないことから、目先のMPC会合においても、現行の金融政策は継続されることが予想される。

2021年のドルバート相場を思い返してみると、1年を通して10%以上上昇を見せた年であり、水準感としても2017年ぶりの高値圏ということで、大きくバート安が加速した1年となった。バート安の背景としては、2021年度に入り、コロナの抑え込みに失敗してしまったこと、そして外国人観光客の受入を進められなかったが主因と思われるが、米国が利上げへのパスを描く一方で、タイは明確な経済回復パスを描けなかったことも印象的であった。

2022年は米国が利上げへのステップを勧める過程においてドルへの資金回帰が進むことが予想されるが、テーバリング終了局面までは、引続きドルの底堅さが継続しよう。前回の米国の利上げステージを思い返してみると、1回の利上げの大変さが思い返され、連続で利上げを実施することは難しい印象は持っているものの、1月時点においては利上げ期待が剥落するほどの展開は予想しにくく、ドルバートは引続き高値圏での推移が継続する展開を予想したい。ただし、一段とドル高に傾斜する展開も想定しにくいところで、上値の重さが意識される中でレンジを切り下げていく展開を視野に入れておきたい。

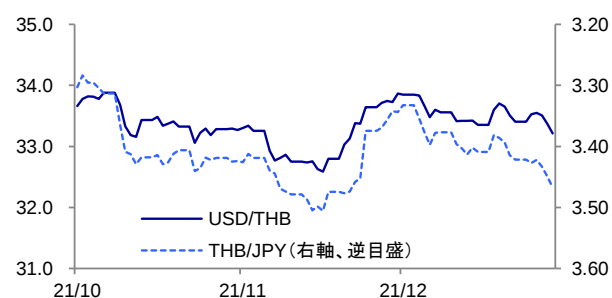
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』

タイは健康に対しての意識は、所得階層ごとに差があるように感じますが、SNSの影響力が大きいこの国においては、インフルエンサーの影響によってムーブメントが変わっていく印象があります。タイでもヴィーガンが流行っている時もありましたが、最近では少し流行りに陰りが見え初めてきた印象であり、健康食についての注目は少し低下した気がします。健康食品については、日頃会話をすることがなく、あまり目立った様子は見られませんが、心が移りやすいタイの国民性を考えると、また数ヶ月後には大きな健康ブームが到来しているかもしれません。

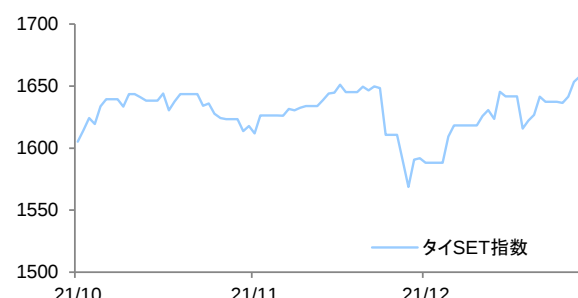
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	消費者信頼感指数	11月	-	48.4	47
12/3	CPI YoY	11月	2.50%	2.71%	2.38%
12/20	輸出 (通関ベース)	11月	17.00%	24.73%	17.40%
12/20	輸入 (通関ベース)	11月	22.50%	20.47%	34.60%
12/20	経常収支 (通関ベース)	11月	\$-600M	\$1,019M	\$-370M
12/21	自動車販売台数	11月	-	71,716	64,462
12/22	タイ中銀政策委員会	12月	0.50%	0.50%	0.50%

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.12	～	4.22
	MYR/JPY	27.02	～	27.77
	JPY/MYR	3.60	～	3.70

マレーシアみずほ銀行 内田 暁

■ 先月の為替相場

先月のリングット相場は16日に発表される米FOMCに注目が集まる中、国内では特段材料もなく外部環境に振られる方向感に乏しい値動き。USD/MYRは4.20を挟みでの揉み合い推移となった。

上旬は、新変異オミクロン株に関する各種報道により世界的にリスク回避の動きが強まる中、新興国通貨売りに押される形でリングットも売り優勢。一方、時間経過と共に、米ファイザー/独ビオンテック社が共同で既存ワクチン追加接種で有効性有り発表されるなど、市場は当初想定ほど大きな混乱とならずオミクロン関連報道を消化していった。但し、市場の注目はリスクオン相場とはならず16日の米FOMCを控えて動意に乏しく様子見姿勢の強い展開となった。

中旬にかけては、英国で初のオミクロン死者が報道された他、14日には米11月PPIが市場予想範囲内ながらインフレ高進が確認されるとUSD/MYRは一時4.23後半までリング売りが一時的に加速。注目された米FOMCは、22年内の利上げ見込みが3回に引き上げるなど予想を上回るタカ派な内容。一方、発表直後こそドル買いとなったが、テーパリングの縮小ペースをこれまでの2倍に加速させる内容は既に市場で織り込み済みの内容。徐々にイベント通過の安心感から株大幅高のリスクオンとなり、リングも買い戻された。

下旬にかけては、世界的なリスクセンチメント回復の流れに乗り、リングは上昇。週初4.23近辺でスタートしたUSD/MYRは、クリスマス前薄商いの中、米国での経口薬承認などコロナ関連報道を好材料に世界的な株高が進行。新興国通貨上昇の流れに乗り、原油高も支援となりリング買いとが進行。22日発表の11月CPIは前年比+3.3%。市場予想を上回ると共に3か月連続で上昇幅が伸長。食品価格の他、飲食・宿泊等サービス業への価格転嫁も進んだが、他国比インフレ進行は緩やかであったこともあり、市場の反応は限定的。その後USD/MYRは4.20を割込むと年末薄商いの中、リングは上げ幅を拡大させ、4.17近辺で年末クローズを迎えた。

■ 今月の見通し

今月のリングット相場は底堅い展開を予想する。昨年後半にかけてドルの利上げ前倒し観測が広がっていく中、ドル買い新興国通貨売りが進んだ他、オミクロン株の欧米地域への急速な拡大が世界的なリスク回避姿勢を強めたことはリングットにとっては逆風となった。一方、市場では特に年後半にかけてドル買いが急速に進む中でも、リングットの下落幅は限定的となり、下値の底堅さを確認できたと考えよう。

欧米主要国を中心にインフレ高進への警戒が市場の注目を集める中、マレーシア国内インフレ動向は、比較的落ち着いた動きを示していることが一つの要因と考えている。直近12/22に発表された11月のCPIはヘッドラインで前年比+3.3%、コアで前年比+0.9%の伸びを記録。サービス業への波及が確認されており、手放しで喜ぶ結果ではなかったものの、主要国の結果と比較すれば許容水準でマネージ可能と現時点で市場は判断している。

今月20日に発表が予定されている中銀政策金利は、インフレ加速に伴う利上げを催促する相場展開とはなっておらず、9会合連続での1.75%据え置きを見込む。国内の景気回復を支援すべく、次回3月以降へ利上げを温存する余地が残っていることは、国内インフレ動向が比較的緩やかであり、インフレ加速による通貨安進行懸念が低いからこそなせる術である。

また、国内政局に目を向けると、第15回連邦議会選挙の前哨戦と呼ばれ注目されていたサラワク州議会選挙は先月18日に実施され、与党側が大勝利を果たした。11月に実施されたマラッカ州議会選挙の与党圧勝と合わせて、政権安定化に向けて更に一步前進したと言えよう。第15回連邦議会選挙は、任期である23年5月から今年7月頃への前倒しがあり有力視されており、イスマイル・サブリン首相率いるUMNOと与党連合による政権安定化期待は膨らむ。今後、オミクロン株の国内感染が広がった場合、イスマイル・サブリン氏の政権手腕が試されることになるが、マラッカ、サラワク州議会選結果から国民の政権安定化への期待は大きいと見ており、新首相としての8月就任以降の運営実績を踏まえると政局要因によるリング安進行はリスクシナリオとしては依然残るものの、今後はリングの底堅い相場展開が期待できそうだ。

■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』

甘いもの好き&揚げ物好き&野菜食べないマレー人の食生活を見ていると、“健康食”を探すのはひと苦労です。コーヒーにコンデンスミルクや砂糖を入れて飲んだり、アヤムゴレン(鶏のから揚げ)やイカンゴレン(魚の揚げ物)に代表されますが様々な食べ物が油へ投入されます。チャーハンにも揚げ物をのっけてあの有名なマレーシア版ナシゴレンになります。ローカル料理は野菜が入らないことも多く、たとえ入っていてもしっかりと油通しされるので、色は全体的に茶色がかっています。見た目からもやはり“健康的”とはいえないのですが、慣れると美味しくて止められないのです。

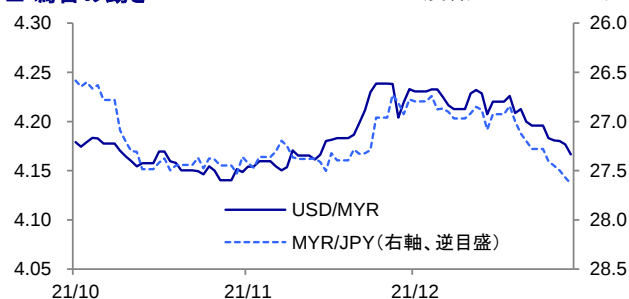
伝統サラダとして食卓に並ぶ“ROJAK”は、砂糖入りの甘辛濃厚ドレッシングをたっぷりかけて美味しく頂きます。最近日本のレストランでも見かけるようになった肉骨茶(バクテー)は、マレーシアは漢方風味の薬膳スープ。薬膳スープであればまさに健康食！で取り上げ可能と思ったのですが、薬膳効果以上に高脂肪が響くと課内スタッフに却下されました。

こうして見ていくと、健康とは程遠く見えるマレーシアですが、若者世代を中心に少しずつ状況は変わりつつあります。課内でも普段からランチでサラダを主食にしたり、週末は朝早くからジョギングやサイクリングで汗を流すなど健康意識が高まっています。

先日健康診断で人生初の肥満に分類された小職ですが、リングット相場とは反対に一本調子で上昇傾向です。健康意識が高まるマレーシアで更なる一段の飛躍に向けて、日々糖分と脂質を摂取していきたいと思えます。

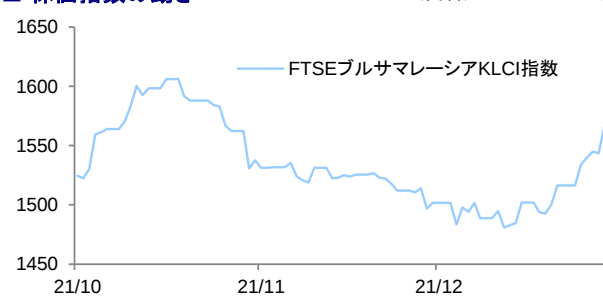
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
12/7	Foreign Reserve
12/22	CPI YoY
12/22	Foreign Reserve
12/28	Exports
12/28	Imports
12/28	Trade Balance

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
Nov30	-	\$116.7b	\$116.5b
Nov	3.2%	3.3%	2.9%
Dec15	-	\$116.3b	\$116.7b
Nov	30.0%	32.4%	25.5%
Nov	30.9%	38.0%	27.9%
Nov	20.00B	18.90B	26.25B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14100 ~ 14500
 IDR/JPY 0.79 ~ 0.82
 JPY/IDR 121.95 ~ 126.58

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

12月のドルルピアは、ルピア安が進行したのち、ルピア高となった。
 月初1日、14300台半ばでスタートしたドルルピアは、新型コロナウイルスの変異種オミクロン株感染拡大に対する警戒感から投資家のリスク回避姿勢が強まる中、ルピアが軟調に推移。3日には14400台へ乗せた。オミクロン株への警戒感が根強い中、翌週初6日には20年8月依頼のルピア安水準となる14400台半ばまでルピア安が進行した。しかし、同日、オミクロン株について、症状は軽度という見解が報道されたことをきっかけにリスク回避ムードが後退したことで、翌7日のルピアは反発。更に8日に、ワクチン3回接種がオミクロン株にも有効という報道が加わり、9日には一時14300台前半までルピアは値を回復した。しかし、10日は米11月消費者物価(CPI)の発表を控える中、期待感からドル高の展開となり、アジア通貨は広範に下落。ルピアも、14400水準まで反落した。期待感の高かった米11月CPIは、市場予想通りとなり、結局ドル売りでの反応となった。これを受けて、翌週初13日のドルルピアは14300台前半までルピアが反発した。その後は米国でFOMC、インドネシアで中銀政策決定会合を控える中、14300台で方向感の乏しい推移が続いた。
 15日、注目のFOMCの結果は22年の3月にも量的緩和を終了することが発表され、FOMCメンバーの政策金利予想分布であるドットチャートで22年中に見込む利上げ回数が3回程度見込まれることが示された。金融政策の正常化に向けて加速していくことが示された格好であったが、あくまで想定範囲という見方が広がり、ドルルピアへの影響は限定的に留まった。16日に開催されたインドネシア中銀政策決定会合では、市場予想通り7日物リバースレボ金利は3.50%に据え置かれた。また、同日インドネシア保健省より、オミクロン株の感染者を国内で初確認したことが発表されたが、すでに各国で感染が拡大している中、ドルルピアへの影響は限定的に留まった。翌週20日以降、オミクロン株への警戒感が和らぐ中で、リスク選好姿勢が強まり、22日にはドルルピアは14200台を示現。石炭価格も堅調に推移する中で24日には月中のルピア高値一時14200割れまでルピア高が進んだ。その後はクリスマス、年末年始で市場参加者が限られる中で14200台を中心に方向感の無い推移となり、結局14200台半ばで21年の取引を終えた。(31日終値時点)

■ 今月の見通し

1月のドルルピアは、横ばいでの推移を予想する。
 21年12月のインドネシア10年物国債の外国人投資家による保有残高はついに900兆ルピアを割り込み、12月29日時点で894兆ルピアまで残高を減らした。背景には、米国の金融緩和の量的緩和の終了と利上げ開始が迫っていること、オミクロン株の感染拡大に対する懸念からリスク回避姿勢が強まったことが挙げられる。残高の減少は21年9月以降続いており、実に100兆ルピア程度、減少した格好だ。これだけ資金流出となると、ルピアの弱さが目立つことが、これまでの「通常」であったが、振り返ればルピアは底堅く推移した。ルピア売りを吸収する担い手がいたからである。
 ルピアの買い需要が強いことを端的に示しているのは、貿易収支の大幅な黒字、それに伴う、経常黒字である。11月の貿易収支は35億ドルと、10月と比較すると黒字額は縮んだが、大きな黒字であることに変わりはない。鉱物性燃料が輸出を牽引していることにも変化はなく、石炭価格が高どまりする中で、引続き貿易黒字は高い水準が維持される可能性がある。
 現在のルピアには売り材料、買い材料が交錯しており、1月もこうした状況が続くだろう。ルピアが比較的安定した動きを続ける中、国内景気を支える為に、インドネシア中銀は引き続き緩和的な政策を維持出来る公算。今月も波乱はなさそうだ。
 今年は、米利上げが開始される見込みであり、長期的にはドルルピアはルピア安を警戒すべきだろう。今月はつかの間の風の時間となることを期待したい。

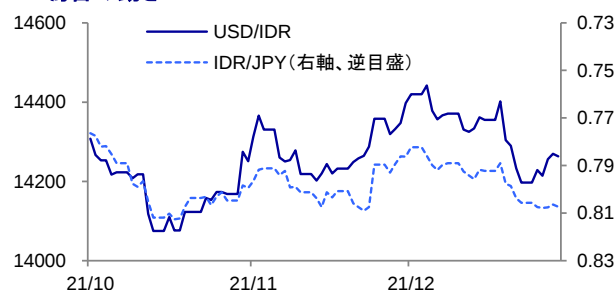
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』
 「インドネシアの納豆」とも呼ばれる大豆を発酵させた食材「テンペ」は当地の健康食品の一つ。納豆と違ってそのままでは食べず、野菜やトウガラシなどと炒めたり、野菜とココナッツミルクで煮たりと食材として使う。また、食べやすい大きさに切って、シンプルに塩にんにく水に漬けて調味してから素揚げしたり、衣をつけて揚げてもおいしい。テンペを使った料理は粘りやにおいもなく、あっさりして食べやすい。
 テンペは栄養価が高く、すべての必須アミノ酸を含む高品質のタンパク質が豊富で、最近ではヴィーガン(完全菜食主義)メニューの食材としても注目されている。たんぱく質のほか、食物繊維が多く、腸内環境のバランスを整えてくれる。また、女性ホルモンに似た働きをする「イソフラボン」もテンペ菌により身体に吸収されやすい形になるため、女性疾患の予防にも役立つと言われている。さらに、コレステロール値の低下、更年期障害の軽減や血圧降下作用、糖尿病などの生活習慣病の予防に役立つといわれている。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

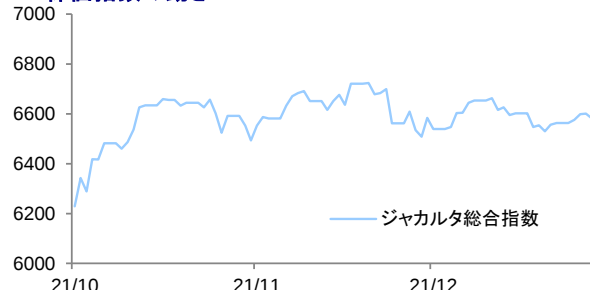
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	CPI(前年同月比)	11月	1.70%	1.75%	1.66%
12/15	貿易収支(USD M)	11月	4500	3510	5736
12/15	輸出(前年比)	11月	44.86%	49.70%	53.35%
12/15	輸入(前年比)	11月	38.13%	52.62%	51.06%
12/16	BI 7days リバースレボ金利	-	3.50%	3.50%	3.50%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 50.00 ~ 51.50
JPY/PHP 2.20 ~ 2.30

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

12月のドルペソ為替相場はFOMCの警戒された程タカ派とならなかったことやフィリピンの景況感改善を受けてペソは堅調推移となり、約1か月ぶりの高値まで上昇するも、クリスマスシーズン後の送金需要減少などを受けて大幅反落となった。

FEDのタカ派シフトに対する警戒感のほか、オミクロン株を巡る懸念からセンチメントが悪化した一方で、マニラ首都圏における現行の外出移動制限の措置が維持されたことがペソのサポート材料となり、12月に入って以降、方向感に欠ける展開が継続。また、11月のフィリピンの消費者物価指数は4.2%と市場予想の4.0%を上回る結果となり、消費者物価指数の上振れを受けた、引き締め観測からペソは強含む局面も見られたが、10月の貿易赤字が40.17億ドルと前月の39.95億ドルから赤字幅が拡大したことが嫌気されるなど、強弱材料が入り混じるなか、FOMCやフィリピン中銀の政策決定会合を控えて、様子見ムードが漂う中、12月前半は1米ドル＝50.300を中心とした比較的狭いレンジでの推移となった。

中旬以降はフィリピン政府が今年の成長率見通しを上昇修正したほか、フィリピン国内の感染者数の減少を受けて、12月末までの現行の外出移動制限延長を決定したことが好感されたほか、FOMCが概ね想定内の結果となった安心感やFOMCに向けたポジション調整の巻き戻しからペソは上昇、節目の1米ドル＝50.00ペソを突破し、約1か月ぶりの高値まで上昇。フィリピン中央銀行は予想通り、9会合連続での政策金利据え置きを決定。経済成長がより確かなものになっているとの認識を示し、景気見通しに対する楽観的な見方や、クリスマスシーズンに向けた国内向け送金需要を背景にペソは堅調推移となった。その後は台風の被害による経済への影響やクリスマスシーズンを終えたサポート要因剥落から、ペソは約3か月ぶりの安値まで急落した。

■ 今月の見通し

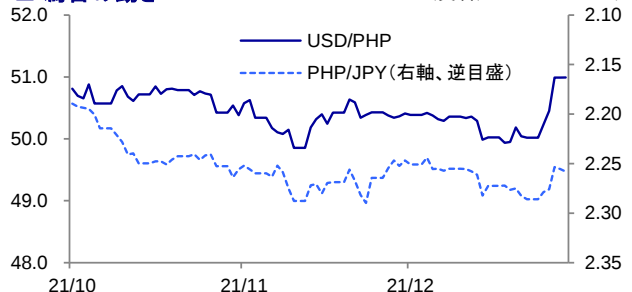
フィリピンにおいても感染者が確認されるなど、オミクロン株を巡る懸念の一方でワクチン接種率の増加や新規感染者数の減少を受けて、現行のマニラ首都圏の外出移動制限が延長され、更なる経済活動の回復期待が拡大しており、景況感改善がペソのサポート要因となろう。但し、重症化率は低いとのデータの一方で感染力の高さと足元の緩和的な外出移動制限を受けて感染が再度拡大する懸念は残り、再厳格化のリスクは今後もペソ下押し要因として燦るほか、世界的な感染者増加によるセンチメント悪化も足枷となろう。

FRBのタカ派シフトを受けた早期利上げ観測からリスクアセットやアジア通貨は軟調となっていたが、懸念していたほどタカ派とならず、イベント通過後は安心感からペソも買戻しの動きがみられるなど落ち着いた動きとなった。しかしながら、正常化に向かう米国とインフレ上振れリスクが意識されるも経済の安定的回復を最優先とし、当面は現行の緩和的スタンスを継続するフィリピンとの金融政策の方向性の違いから、引き続き、中長期的にはドル高ペソ安バイアスが掛かりやすい地合いを見込む。また、米国のテーバリング終了後の利上げがほぼ確実となるなか、過剰流動性の恩恵を受けて上昇していたリスクアセット急落によるリスクオフも潜在的なペソ安要因として留意したい。

移動制限の緩和を受けた経済活動の回復がペソのサポートとなるほか、足許、来年は約3回の米利上げを市場が織り込んでいる中、好調な米経済指標を受けても利上げタイミングの更なる前倒しの可能性は大きくないとみられ、ドルの上昇余地は限定的との見方の中、緩やかなドル高ペソ安を見込む。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 73.00 ~ 77.00
INR/JPY 1.48 ~ 1.57

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【12月の米ドル/インドルピーは上に往って来いの展開だった】

オミクロン株発見を背景として11月終盤に下値を切り上げたドル/ルピーは74.96で12月取引をスタート。月初は米10年国債利回りが2か月ぶり水準まで低下、原油価格も8月以来の安値水準となったが、オミクロン株を背景としたリスク回避ムードが新興国通貨を圧迫。3日にはカルナタカ州でインド初となるオミクロン感染者が確認される。週末に発表された米雇用統計はまちまちな内容であったが、テーパリング見通しへの影響がないと見るや全般的なドル買いとなる。

二週目は月曜から75.50をトライしにいく展開だったが、インド中銀が積極的にドル売り介入を行っているとの話題に75.50の壁は厚く、政策会合が発表された8日には一時75.57をつけるもすぐに押し戻される展開。ただし、10日にはFRBがコロナ対策よりもインフレ懸念を優先するのでは、との観測が広がる中で、ドルの魅力が高まる展開に75.50を明確に上抜ける。

三週目に入ると世界保健機関がオミクロンは「非常に高い」リスクと指摘し、オックスフォード大学もファイザーとアストラゼナカワクチンを二回接種していてもオミクロン株への効力が低いことを指摘すると為替市場でも一段とリスク回避が鮮明になり、ドル/ルピーも取引水準を切り上げる。一方で米テーパリングペースの拡大観測は根強く、ドル高の雰囲気連れられ大台76を突破。FOMCの翌日には18か月ぶりとなる76.315の当月高値を示現。ただしその後はセルザファクト的な流れにドル買い持ち勢が利益確定のドル売りを出し、地場輸出勢からもドル売りが観測されるとドル/ルピー相場は反転。

四週目に入るとオミクロン株の重症化リスクが低いとの報道や米当局がファイザー社の経口抗ウイルス剤を認可したことからリスクセンチメントが回復し、ルピーへの資金流入が予想されると地場ソフトウェア企業など輸出勢がさらにドル売りヘッジをかけはじめ、年末で明らかに流動性が落ちていることも相まって値動きが大きくなり、75台前半まで押し戻される。

最終週に入ると一段と取引量が細る中、27日に74台へ下落、31日には当月安値となる74.095を示現した後、74.34で2021年の取引を終えた。

■ 今月の見通し

【1月の米ドル/インドルピーは上昇しやすい展開を予想】

年末のドル/ルピーは高値から2.5%を超える下落となり、76から74まで一気に水準を切り下げた。オミクロン株に対する懸念が和らいだという材料もあったが、取引量が著しく減少していた中で、ある種場外乱闘的につけた水準であり、基本的には取引レベルを戻しにいく展開を想定。

米国要因ではテーパリング加速、中央銀行メンバーの2022年の利上げ回数予想の中央値が3回まで増加、メンバー全員が1回以上の利上げを見込んでおり、ドル高/ルピー安を肯定する内容となった。ただ、既に市場には織り込みが進んでおり、一段とルピー安を進行させるにはさらなる材料が必要。国内要因では12月に発表されたインド貿易赤字は230億ドルと、記録的な赤字水準に。原油価格の上昇と金の輸入が増えたことが背景。これらを輸入している実需勢によるドル買い/ルピー売りにも注意が必要、加えて貿易収支悪化から経常収支赤字が拡大すると外国人投資家がルピーを売ることに留意。またオミクロン株によって欧州では複数の国で感染者数が過去最多になっており、インドでの拡大も懸念されること。

他方、ルピー高要因では、インドの生命保険公社やネット通販大手など大口の株式公開が予定されており、昨年秋のように外国人投資家がこれらの株式を取得することに伴ったドル売り/ルピー買いが想定される。またインド国債がグローバルな債券指数に採用されることに伴った外国人によるインド国債買いを予想する声もある。

ルピーについては上下共に要因があるが、冒頭で指摘したように、一旦は75台へと水準を戻すような展開を想定。コロナ感染者が急増するようであれば一段のルピー安を想定するが、欧州のようなことにならないれば次なる材料探しで方向感を探るような展開になるのでは。

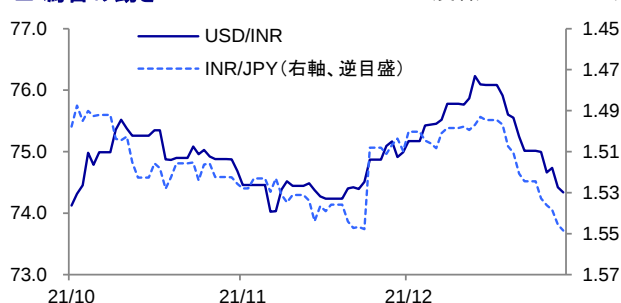
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の健康食、健康食品』

「ゴールデン・ミルク」という飲料をご存知だろうか。その強力な抗酸化作用からインドの伝統的健康法「アーユルヴェーダ」の治療薬として長年使われている「ターメリック」の粉末を材料とする。名の通り、その色は黄金だ。五千年以上の歴史を持つといわれるアーユルヴェーダは、日本では特に女性の間で美容の分野で認知されていることと思う。伝統的健康法と言っても、ここインドにおいては国家資格を持った専門医師がおり、現代医学と並び国家公認の医学体系の一部だ。それを証明するように、インド政府には、「アユシュ省(インド伝統医療省)」という、アーユルヴェーダを含む伝統医療・代替医療の教育継承を目的とした機関も存在している。このコロナ禍において、先ごろ、アユシュ省からアーユルヴェーダをもとにした感染予防対策のプロトコルがリリースされた。あくまでも良好な免疫状態を維持する手法であることを前提とし、その食事法の中で取り上げられているのが前出の「ゴールデン・ミルク」だ。プロトコル内では、「150mlのホットミルクに小さじ半分のHaldi(ターメリック)粉末を入れ、夜に一回飲む」とある。ターメリックとは、所謂「ウコン」である。インド原産のショウガ科の植物で、カレーのスパイスとしても用いられている。日本では、二日酔い対策にも効果的として知られているだろう。ゴールデン・ミルクは、インドの家庭では風邪予防として一般的に飲まれており、日本でいうところの「ショウガ湯」に近いだろう。インドと日本の健康法に少なからずのリンクを感じるところだ。(チェンナイ・蛇名真理子)

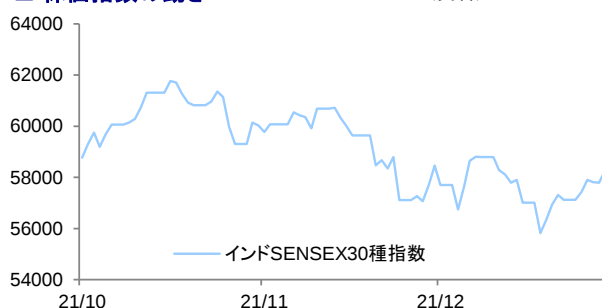
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	-	57.6	55.9
12/8	政策金利	-	4.00%	4.00%	4.00%
12/10	鉱工業生産	10月	3.70%	3.20%	3.30%
12/13	CPI	11月	5.10%	4.91%	4.48%

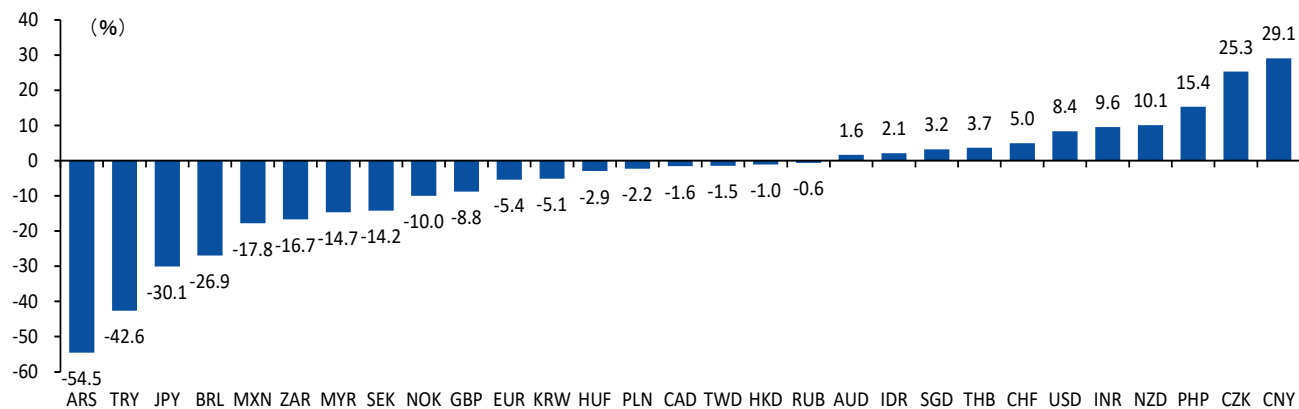
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2020年末	2021年12月末	騰落率	株式市場	2020年末	2021年12月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	30606.48	36338.3	18.7%	-
日本	USD/JPY	103.25	115.08	11.5%	日経平均株価	27444.17	28791.71	4.9%	-5.9%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2216	1.137	-6.9%	ドイツDAX指数	13718.78	15884.86	15.8%	15.8%
英国	GBP/USD	1.367	1.3532	-1.0%	ロンドンFTSE100指数	6460.52	7384.54	14.3%	15.5%
豪州	AUD/USD	0.7694	0.7263	-5.6%	S&P/ASX200指数	6587.096	7444.642	13.0%	19.7%
カナダ	USD/CAD	1.2725	1.2637	-0.7%	S&PTロント総合指数	17433.36	21222.84	21.7%	22.6%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5272	6.3561	-2.6%	上海総合	3473.069	3639.775	4.8%	7.6%
香港	USD/HKD	7.7531	7.7966	0.6%	香港ハンセン	27231.13	23397.67	-14.1%	-14.6%
インド	USD/INR	73.07	74.3375	1.7%	インドSENSEX30種	47751.33	58253.82	22.0%	19.9%
インドネシア	USD/IDR	14050	14263	1.5%	ジャカルタ総合	5979.073	6581.482	10.1%	8.4%
韓国	USD/KRW	1086.51	1189.88	9.5%	韓国総合株価	2873.47	2977.65	3.6%	-5.4%
マレーシア	USD/MYR	4.0203	4.1665	3.6%	ブルサマレーシアKLCI	1627.21	1567.53	-3.7%	-7.0%
フィリピン	USD/PHP	48.03	50.992	6.2%	フィリピン総合	7139.71	7122.63	-0.2%	-6.0%
シンガポール	USD/SGD	1.3221	1.349	2.0%	シンガポールST	2843.81	3123.68	9.8%	7.7%
台湾	USD/TWD	28.094	27.674	-1.5%	台湾加権	14732.53	18218.84	23.7%	25.5%
タイ	USD/THB	29.959	33.211	10.9%	タイSET	1449.35	1657.62	14.4%	3.2%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2021年12月時点)



■ 実質GDP成長率

	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2020	2021
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	-31.2	33.8	4.5	6.3	6.7	2.3		-3.4	
日本*	-28.5	22.1	9.6	-2.9	2.0	-3.6		-4.6	
ユーロ圏	-14.5	-4.1	-4.4	-1.1	14.4	3.9		-6.4	
英国	-21.2	-7.8	-6.4	-5.1	24.2	6.8		-9.4	6.8
豪州	-6.0	-3.5	-0.8	1.4	9.5	3.9		-2.2	
カナダ*	-37.4	41.1	9.1	4.9	-3.2	5.5		-5.2	
エマージングアジア									
中国	3.2	4.9	6.5	18.3	7.9	4.9		2.2	
香港	-9.0	-3.6	-2.8	8.0	7.6	5.4		-6.1	
インド	-24.4	-7.4	0.5	1.6	20.1	8.4		6.8	6.5
インドネシア	-5.3	-3.5	-2.2	-0.7	7.1	3.5		-2.0	
韓国	-2.6	-1.0	-1.1	1.9	6.0	4.0		-0.9	4.0
マレーシア	-17.2	-2.7	-3.4	-0.5	16.1	-4.5		-5.6	
フィリピン	-17.0	-11.6	-8.3	-3.9	12.0	7.1		-9.6	
シンガポール	-13.3	-5.8	-2.4	1.6	15.3	7.1	5.9	-5.4	7.5
台湾	0.6	4.3	5.3	9.2	7.8	3.7		3.4	
タイ	-12.1	-6.4	-4.2	-2.6	7.6	-0.3		-6.1	7.6

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	21/04	21/05	21/06	21/07	21/08	21/09	21/10	22/11	2020	2021
	(%)								(%)	
先進国										
米国	6.1	5.8	5.9	5.4	5.2	4.8	4.6	4.2	8.1	4.2
日本	2.8	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.7	2.8	2.8	2.8
ユーロ圏	8.1	8.0	7.8	7.6	7.5	7.4	7.3		7.9	7.8
英国	4.8	4.8	4.7	4.6	4.5	4.3	4.2		4.4	4.7
豪州	5.5	5.1	4.9	4.6	4.5	4.6	5.2	4.6	6.5	5.2
カナダ	8.1	8.2	7.8	7.5	7.1	6.9	6.7	6.0	9.6	7.6
エマージングアジア										
中国			3.9						4.0	3.9
香港	6.4	6.0	5.5	5.0	4.7	4.5	4.3	4.1	5.5	5.6
インドネシア									6.0	6.4
韓国	3.7	3.8	3.7	3.3	2.8	3.0	3.2	3.1	4.0	3.6
マレーシア	4.6	4.5	4.8	4.8	4.6	4.5	4.3		4.5	4.7
フィリピン	8.7	7.7	7.7	6.9	8.1	8.9	7.4		10.4	8.0
シンガポール	2.9	2.8	2.7	2.8	2.7	2.6	2.6		3.0	2.7
台湾	3.7	4.2	4.8	4.4	4.1	3.9	3.8	3.7	3.9	4.0
タイ	1.9			2.3					1.7	

(資料) ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	21/04	21/05	21/06	21/07	21/08	21/09	21/10	21/11	21/12	2020	2021
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	4.2	5.0	5.4	5.4	5.3	5.4	6.2	6.8		1.2	4.5
日本	-1.1	-0.8	-0.5	-0.3	-0.4	0.2	0.1	0.6		0.0	-0.3
ユーロ圏	1.6	2.0	1.9	2.2	3.0	3.4	4.1	4.9		0.3	2.4
英国	1.5	2.1	2.5	2.0	3.2	3.1	4.2	5.1		0.9	5.1
豪州			3.8			3.0				0.9	2.6
カナダ	3.4	3.6	3.1	3.7	4.1	4.4	4.7	4.7		0.7	3.3
エマージングアジア											
中国	0.9	1.3	1.1	1.0	0.8	0.7	1.5	2.3		2.5	0.9
香港	0.8	1.0	0.7	3.7	1.6	1.4	1.7	1.8		0.3	
インド	4.2	6.3	6.3	5.6	5.3	4.4	4.5	4.9		6.6	
インドネシア	1.4	1.7	1.3	1.5	1.6	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	1.6
韓国	2.5	2.6	2.4	2.6	2.6	2.4	3.2	3.8	3.7	0.5	3.7
マレーシア	4.7	4.4	3.4	2.2	2.0	2.2	2.9	3.3		-1.1	
フィリピン	4.5	4.5	4.1	4.0	4.9	4.8	4.6	4.2		2.6	4.5
シンガポール	2.1	2.4	2.4	2.5	2.4	2.5	3.2	3.8		-0.2	3.8
台湾	2.1	2.5	1.8	1.9	2.3	2.6	2.5	2.8		-0.2	
タイ	3.4	2.4	1.3	0.5	0.0	1.7	2.4	2.7		-0.8	1.2

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2020	2021
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.1	-2.5	-2.6	-2.9	-3.1	-3.2	-3.4	-3.0	
日本	3.4	2.8	2.7	3.0	3.0	3.5	3.4		
ユーロ圏	1.7	1.7	1.6	2.0	2.6	2.9	2.7	2.0	
英国	-1.9	-1.6	-1.3	-2.6	-2.5	-2.6	-3.3		
豪州	1.2	1.9	2.0	2.6	3.2	3.4	3.9		
カナダ	-2.0	-2.0	-2.0	-1.8	-0.9	-0.5		-1.8	
エマージングアジア									
中国	0.3	0.9	1.3	1.8	2.4	2.0	1.9		
香港	4.7	5.9	7.1	6.9	9.4	9.5	9.3		
インド	-0.8	0.4	1.3	1.3	0.9	0.4	-0.5	1.3	
インドネシア	-2.4	-2.1	-1.3	-0.4	-0.2	-0.1	0.2	-0.4	0.2
韓国	3.8	3.7	3.8	4.4	4.9	5.7	5.9		
マレーシア	2.8	2.5	3.5	4.4	4.6	4.8	3.8		
フィリピン	0.4	1.5	2.6	3.5	3.4	1.7	0.4		
シンガポール	14.8	15.6	16.8	17.6	18.5	19.0	19.5	17.6	20.6
台湾	10.4	10.7	12.8	13.9	14.6	15.2	14.3	13.9	
タイ	6.9	6.6	6.3	4.2	1.8	0.9	-1.7		

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2021/12/15	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2021/12/17	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2021/12/16	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2021/12/16	+15bp	2021/12/16	+15bp
豪州	キャッシュ・レート	0.10	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/11/3	-15bp	2021/12/7	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2021/12/8	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.80	緩和: 2012/6/8	6.31	2021/12/20	-5bp	2021/12/20	-5bp
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2021/12/8	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.50	緩和: 2019/7/18	6.00	2021/2/18	-25bp	2021/12/16	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.00	引き締め: 2021/8/26	0.50	2021/11/25	+25bp	2021/11/25	+25bp
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2021/11/3	現状維持
フィリピン	翌日物金利	2.00	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/11/19	-25bp	2021/12/16	現状維持
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.125	緩和: 2015/9/24	1.875	2020/3/19	-25bp	2021/9/23	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2021/12/22	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行